

難逐、愧我心愚惹、倒瀾蚤欲挽、似當車食廐、  
禮記月令疏證  
蠅燕趙之際謂

四人ナリ

驛遞局認可

明治十八年七月廿五日發兌

# 東洋學藝雜誌



東洋學藝社



第四拾六號



緒言

我邦人ノ理學ノ思想ニ乏シキハ識者ノ  
 常ニ憂フルトコロナリ故ニ之ヲ救ハンカ  
 爲ニ此雜誌ニ理學ニ關係アル文章ヲ  
 掲載シテ其性質及ヒ功用ヲ世ニ明ニ  
 センテヲ力メタリ固ヨリ詰屈解シ難  
 キコトノミヲ討論スルニ非スト雖ト  
 モ世尙ホ或ハ此雜誌ノ讀ミ難キヲ困  
 シムモノナキニ非ス因テ更ニ其區域  
 ヲ廣メ文藝上ニ涉レル平易ナル文章  
 ヲモ其間ニ雜ヘ甘苦相半ナラシメ以  
 テ世人ノ望ニ負ク無キヲ期スト云爾

目錄

論說

○蠶の蛆及び蠅の息をする道具

佐々木忠二郎

○孔子ノ教ハ支那國ニ何如ナル  
影況ヲ與ヘシヤ

赤坐好義

○通俗「ダ」ルウ井（第四十五號ノ續）  
ン進化ノ理

霞城山人

○唯物論一斑  
第一編カト物質ヲ論ス

中川重麗抄譯

○道義一定ノ紀律ナキ所以ヲ論ス

寺山啓之助

理醫學講談會筆記

○染物ノ話

高松豊吉

雜報數件

雜錄

○與某先生論漢學書

杉浦正臣

○遺族ノ飢寒ナカラシムヲ欲セハ  
我カ生命ヲ保險セシムルニ若カス

牛東山人

學會記事

套言譯語



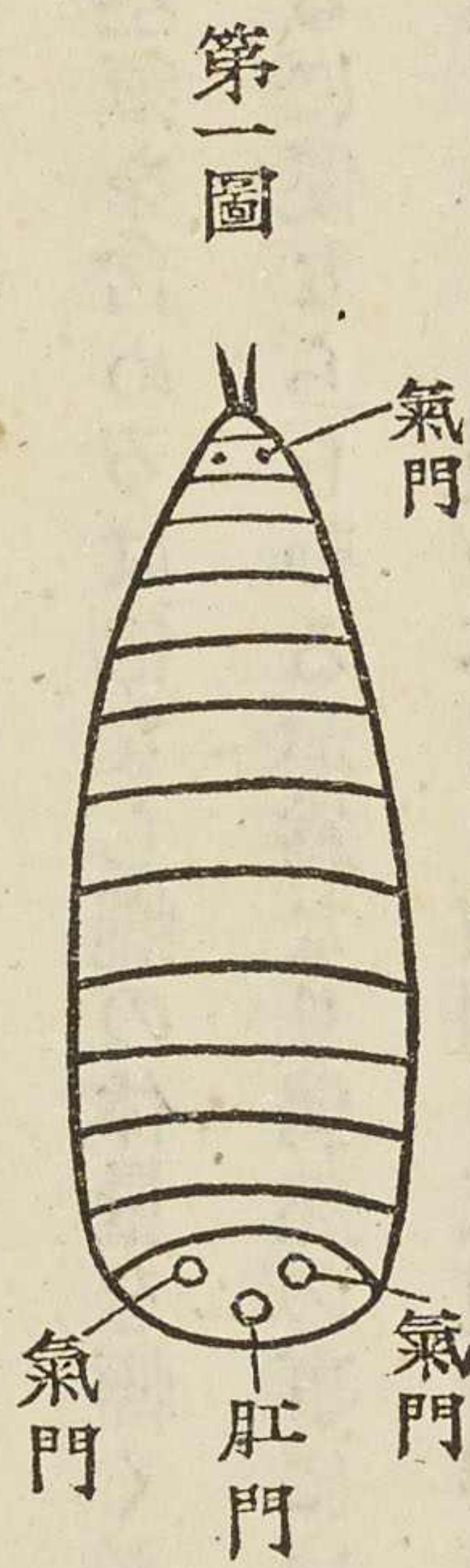
東洋學藝雜誌第三卷第四十六號

明治十八年七月廿五日發兌

蠶の蛆及び蠅の息をする道具 佐々木忠二郎

動物の大氣に呼吸するハ漁船が蒸氣を吐く如し動物一たび呼吸の働きを停むる時は忽ち黄泉の客と爲りて再び娑婆に出づること能はず恰も蒸氣と吐くの働き停まれ船の進退維れ谷りて大洋に漂ふに似たり故に呼吸の働きは一瞬時とても忽せにハ爲し得ざるものなりと知るべし扱て人の息するは口及び鼻の孔より大氣を吸ふて之を肺臓に送り入れ肺臓之を受くれば即ち其受持の働きを營みて再び之と口及び鼻の孔より吐出すものなり魚類の如きは陸に棲息することと爲さずして水中に棲息するものなれば直に大氣を呼吸することを得ず然れども鰓そらと云ふ道具ありて水に溶けたる空氣を受け肺の臓と同様の働きとなすなり蛆や蠅も亦呼吸をなして生活するものなれども肺の臓もなく又た鰓の如きものもなければ螺旋絲より成りたる管にて呼吸するものなり而して蠶の蛆は云ふに及ば

ず其他腐肉に生ずる蛆も糞溜に生ずる蛆も皆な右の管にて呼吸するなり故に此管を呼吸管又は氣管と稱ふるなり今蠶の蛆を見るに身長け五六分もありて頭尖り唇太く恰も圓筒と切りたるが如き面にて終れり其面を熟く見れば三つの黒き點ありて鼎足に均列せり(第一圖)其内二つ

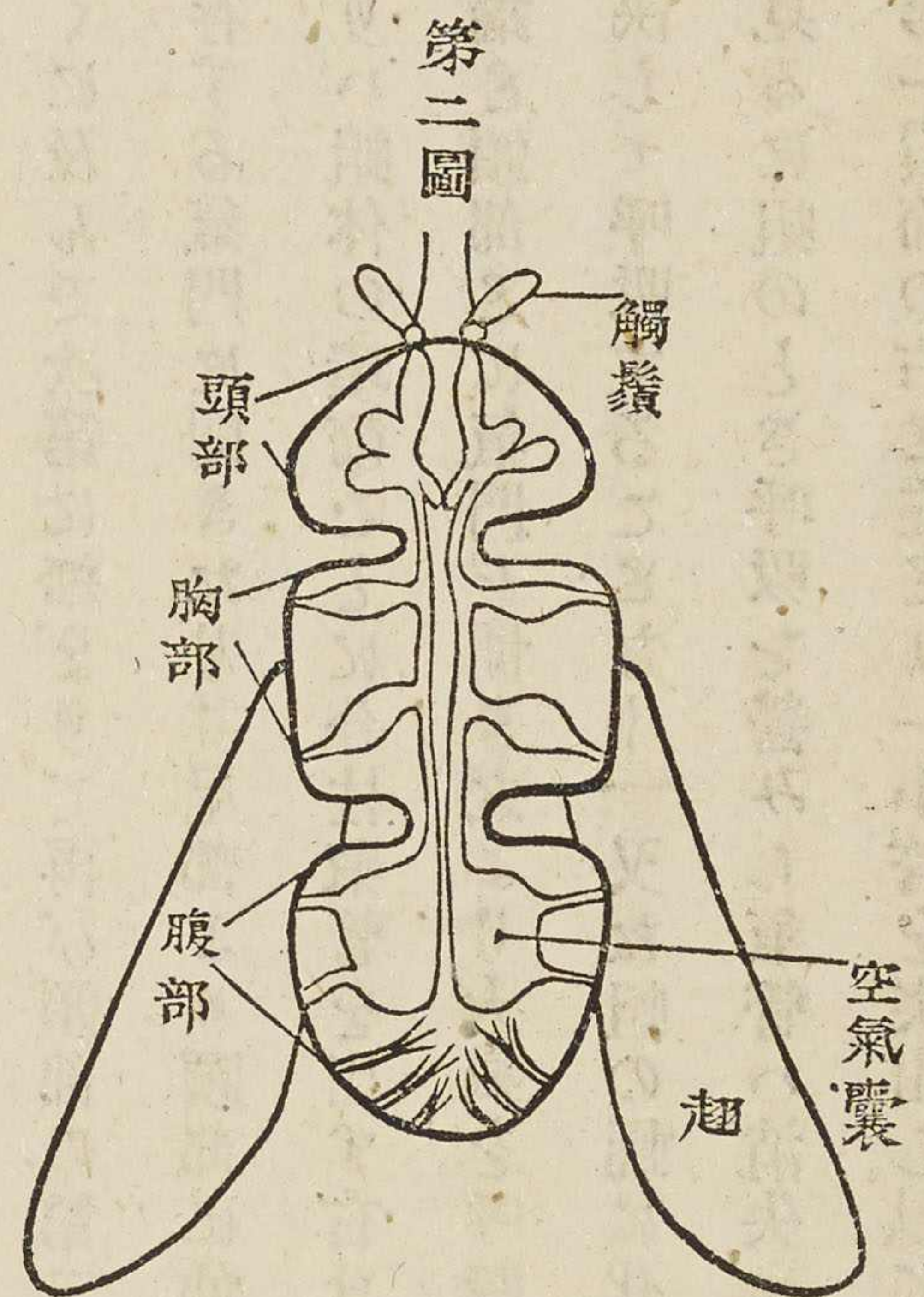


第一圖 氣門 氣門 氣門 は大にして一つは小なり其大なるものは大氣を

体内に容るゝの門にして小なるものは肛門なり氣門の周りに褐色の革質の板にて圍まれたり氣門の内側には氣管の接するものありて体内の左右に伸長し蛆の頭部に近づくに及んで次第に細まりて再び頭部の第二環節の側面よ存する氣門に開きたり其尾部より頭部に伸長せる氣管よりハ蛆体の環節ごとに分枝氣管を出す右れ如く蛆には尾端と頭部とに氣門を開き之より大氣を呼吸して口よりは決して呼吸することなし」又た蛆の蛹に化けたるものを見るに蛆のとき呼吸を營みし氣管ハ消失せて更に胸部の第一環節の右と左とよ一小管を突出し以て大氣を呼吸す



るなり是れより進んで蠅の呼吸する道具此作用は獨り呼吸を掌るのみならず尙ほ頗る奇妙なる作用と營むものなり今余が辨明して世の諸學士に注意を乞はんとする者此奇妙なる作用を營むの一点にあり此ふ一疋の蠅を撮り來りて其体を熟く調査するとき左の狀体を見出し得べし胸部の第一環節と第三環節との兩側ふハ楕圓形の氣門と開き氣門の周りには分枝したる毛の簇生するありこれは大氣を吸込む時大氣中に混交せる塵埃の氣管内に侵入するを防ぐが爲めにして丁度水囊にて水を漉すと同じ理なり又た腹部を視れば五つの環節よりなりて每環節の裏面には二つ宛小さく開きたる氣門あり此氣門は形圓く其内側にハ硬毛の如きものと密生しこれも大氣を漉すが爲に具はること胸部の氣門の周りに簇生する毛に同じ右の如く蠅の胸部にハ都合四つ腹部にハ都合十の氣門あり又た小さき鋏刀にて蠅を切開き見るときは頭部の中にハ薄膜にて成りたる四對の空氣囊胸部の中には二對腹部の中にハ一對の空氣囊を存するを視るべし第二圖頭部の中よ存する四對の中一對ハ觸鬚の本に存じ二對は複眼の本



に存じ一對は口部の中に存じたり胸部に存する二對の中一對を胸部の第一環節よ開き一對ハ其

第三環節に開ける氣門よ開けり腹部に存する一對は各々大にして且つ二個の空氣管に依りて腹部の第一及び第二の環節よ存する氣門に開たり此空氣囊の大にして多量の空氣を含めるは他なし蠅の体量を軽くして空中に飛行するに便ならしむるが爲なり偶然の事にはあらぬぞかし其様の恰も鳥類の体内よ數個の氣胞を存じ且つ其骨内よも空氣を入れ置き以て翔行の際体量を輕んするものと同一なり去りながら腹部の第三第四及び第五の環節に存する氣門ハ空氣囊ふは開かずして只た尋常の空氣管に連れり此空氣管は幾回も枝分れして其枝の末ハ腸及び生殖器よ連れり又た腹部の空氣囊ハ各々太き空氣管を出して胸部

に存する空氣囊に連り胸部の空氣囊は再び一本の太き空

頭部の空氣囊に送り込むものなるにより頭部の空氣囊ハ



よ存する四對の中一對ハ觸鬚の本に存じ二對は復眼の本

連れり又た腹部の空氣囊ハ各々太き空氣管を出して胸部

に存ずる空氣囊に連り胸部の空氣囊は再び一本の太き空氣管と出して頭部に存ずる空氣囊は連りたり斯の如く蠅の体内には空氣囊と空氣管とが排列して体内に吸入れたる空氣にて周く体内にめぐれる血液を清らかにしその上空氣囊には充分に空氣を籠めて体量を輕からしむるの用に供したり然れども特り此等の作用を爲すのみには止らずして尙ほ頗る面白き作用と營むなり其作用と云ふは四月の頃蠅の土中より匍出んとするときに容易く視るべきものとを其視るべきものとハ即ち頭部の頂より大いなる囊を出入すること是なり其概略ハ昨明治十七年十一月廿五日發兌の本誌に載せられたれば讀者ハ該紙上にて見られしことならん今ハ其如何んして頭部の頂に大囊が出入するかハ理合と辨明せんと欲するなり己に前にも陳べたる如く蠅の頭胸腹の三部には夫々空氣囊と空氣管との備付ありて蠅が頭部の頂に大囊の出さんと欲するときは先づ腹部の左右即ち空氣囊の存ずる處を收縮して皺を生じ其囊内に存ずる空氣と胸部に存ずる空氣囊に送り込むなり此時胸部も亦腹部の如く收縮して其囊内に存ずる空氣を

頭部の空氣囊に送り込むものなるにより頭部の空氣囊ハ腹部と胸部とに存ずる空氣を盡く受くるが爲め頭部は忽ち擴張して大囊と其頂に出すの狀と爲すものなり故に若し頭部の囊内に存ずる空氣を再び胸部腹部に返しやるとさハ頭部の形ハ元に復し胸部腹部の收縮も頓に失せ隨て其形ち元に復するなり其働きにて土中より土上に匍出づるを得るなり蓋し蠅の土中より匍出でんとするときは脚皆な軟かくして其働き充分ならざるが故にかゝる頭部の働きなくんバ土中に在りて只だ死を待つより外なかるべし嗚呼微小なる頭部の囊も蠅にありては其用大なりと謂ふべし造化の工また奇ならずや

○

孔子ノ教ハ支那國ニ何如ナル影響ヲ與ヘシヤ

赤坐好義

東半球ノ東北ニ跨リ一大國アリ其人民ハ米國ニ八倍シ其土地ハ英國ニ四十倍ス江河ノ長キハ千餘里ニ涉リ山岳ノ高キハ二千丈ニ達ス而シテ此數邦ノ間ニ介シ日本、琉球、臺灣、呂宋、安南海ヲ隔テ、之ヲ擁掖シ魯西亞、土耳其斯



且、印度、暹羅、緬甸、陸ニ縁ツテ之ヲ圍繞セリ嗚呼此國ノ文明ヲシテ三千年ノ今日ニ永續セシムルハ抑モ何ソヤ埃及、波斯ノ文明ヲ見ヨ是等ノ國ハ其地大ナルニアラス其民衆ナルニアラス外寇襲撃ノ患多キニアラス然レモ一朝盛壯ヲ極メ天下ヲ壓倒セシ後忽チ荒涼湮滅シ今ニ至リテ徒ラニ其遺墟ヲ有シ尙往古ノ文明ヲ保チ今ニ至テ凜平トシテ宇内ニ存立セリ抑モ此大國ノ歴史ニ溯ルニ在昔周ノ世ニ孔子ト云フ人アリ篤行ニシテ人ヲ教ヘ專ラ世道ヲ修ムルヲ以テ己レカ任トナス然ルニ此人ノ教蓋シ當時ニ棄テラル、ト雖モ大ニ後世ニ振ヒ頗ル支那人心ヲ改良シ其文明ニ勢力ヲ及スト云ヘリ然ラハ則チ帝國ノ隆替ヲ爲ス所以亦此人ノ教ノ然ル者ト謂ヘキ乎然レモ此人ノ教ニ由レハ道德ト政治トヲ一ニシ一身ト天下トヲ等シクシ國君ヲ父母トシ人民ヲ赤子トス且ツ尤モ外交ヲ嫌忌シ支那風習ニ隨ヒ他國ヲ卑ミテ夷狄トシ自國ヲ尊テ中華トス其言一ツニ自由文明ノ發達ヲ助クル者ナシ而シテ其帝國ヲ維持スルニ利アル者ハ何ソヤ

今姑ク之ヲ擱キ眼ヲ轉シ當時支那ノ狀態ヲ見ヨ王道ノ政其由來スル遠シ且ツ君權ハ戰爭ヲ以テ日ニ固ク保護ハ兵事ニ因テ日ニ貴シ人民ハ絶テ自治ノ風ナク徒ニ被治ノ恩澤ヲ希フ其慣習モ亦久シ若シ此時ニ當リ假令人ノ自由ヲ其間ニ唱フルアルモ蓋シ其功ヲ見ルコト鮮ナシ蓋シ說ノ行ハルハ其說ノ高卑何如ニアラスシテ其人民氣品何如ニアリ見ヨ同權ノ說ハ釋伽之ヲ唱ヘ耶蘇亦之ヲ唱フ而ルニ此等ノ說一時印度小亞細亞ニ行ハルト雖モ遂ニ其人民ノ氣品ニ克ツ能ス今ニ於テカ忽諸タリ是ニ由テ之ヲ觀レハ孔子ノ君權ヲ重シ民權ヲ卑ムモ畢竟支那當代ニ己ム可カラサルカ爲メナリ然ラハ則チ孔子ノ教ハ支那文明ヲ爲サシテ支那ノ文明ハ孔子ノ教ヲ作セシナリ何トナレハ若シ孔子其說ヲシテ其言フ所ノ若クナラサラシメハ必ス荀揚甲韓ト並廢セラレ以テ豪傑ニ嫌ハレ以テ帝王ニ嫌ハレ以テ斯廣漠タル大國ヲ維持スルノ策略ニ嫌ハレテ終ニ其氣焰ヲ發スルコトナケン今一步ヲ進メテ論センニ支那ノ北部ヲ滿洲ト云フ本匈奴韃靼ノ種族焉ニ在リ此民ヤ勇敢ニシテ戰ヲ好ム若シ孔子



シ而シテ其帝國ヲ維持スルニ利アル者ハ何ソヤ

韃靼ノ種族焉ニ在リ此民ヤ勇敢ニシテ戰ヲ好ム若シ孔子

ヲシテ此人種ヲ疎セサレハ歐洲自由ハ日耳曼ノ山林間ヨリ跳出セシ如ク支那ノ自由モ亦蒙古ノ沙漠中ヨリ發生スル歟

然ルニ此匈奴韃靼人種ハ既ニ亞細亞ノ大半ヲ跋渉セシモ未タ曾テ一點ノ文明ヲ留メス管ニ之ヲ留メサルノミナラス却テ其國ノ文明ヲ障害スルニ至ル若シ孔子ヲシテ其説ク所ニ反セシメハ支那今日ノ景況ハ歐洲ノ景況ヲナサン乎抑モ埃及波斯ノ形狀ヲナサンナリ之レ知リ難キニアラス

然ラハ則チ苟シクモ此大國ニ爲スアルノモノハ其人心ノ自由ヲ發達シ其人民ノ權利ヲ弘ムル能ハス唯タ治安ヲ永續シ帝國ヲ維持スルノ道アルノミ

扱テ此廣漠タル大國ヲ維持スルニ必ス一種ノ情ナカルヘカラス此百餘州ノ人民ハ皆周室ノ臣下ニシテ其少差異アルニ係ハラス皆同一ノ風習ヲ有シ皆同一ノ言語ヲ有ス最モ平時抗敵ノ外ニ必ス一種ノ情ナカルヘカラス若シ戎狄ノ我ヲ滅サハ我風俗ハ左衽トナリ我言語ハ鳩舌トナリ我法服ハ胡服トナリ我頭髮ハ被髮トナリ我先王ノ邦國ハ皆

戎狄ニ蹂躪セラレ我獨立ハ持シ難シ若シ戎狄ノ我ヲ覘ヘハ此百餘州ノ人民ハ其私讎内怨ヲ捨テ必ス膺ツテ懲サ、ルヘカラス此情ハ支那人民ノ嘗テ有スル所ニシテ孔子ノ之ヲ助成セシモノナリ

夫レ自國ヲ尊テ他國ヲ卑ムハ是亦一種ノ愛國心ニシテ國民ノ須臾モ無カルヘカラサル者ナリ此情ヤ我身ヲ愛スルニ始マリ同類ヲ救フニ中シ國風ヲ亂サ、ルニ終ル此情ヤ能ク人民ノ心情ヲ一ニシ能ク人民ノ氣力ヲ合シ以テ能ク衝ヲ千里ノ外ニ折ク者ナリ此情ヤ能ク先王ノ耻辱ヲ雪キ能ク積年ノ宿怨ヲ散シ自死シテ以テ國ニ殉スル者ナリ此情ヤ之ヲ約言スレハ一國ノ獨立ヲ持シ并ニ一國ノ面目ヲ保ツ者ナリ

唯其然リ故ニ孔子此情ヲ養フニ汲々セリ其意蓋シ著書ニ於テ明カナリ論語ハ孔子ノ家言ヲ記セシ書ニシテ支那政治ヲ論セシ書ニアラス故ニ其言唯々仁義道德ノ域ニ止マリテ支那全体ノ事ニ及フナシ偶々語ノ政治ニ及フアルモ唯々一國內ノ政治ニテ君主ト人民トノ關係ニノミ止マリテ支那全体ノ關係ニ及フコナシ故ニ此書ニハ戎狄ノコトヲ



言フヲ稀レナリ其天下ノ關係ヲ説キシ者ハ春秋ヲ以テ始  
 メトス若シ孔子ヲシテ大國ニ仕ヘ卿相ノ位ヲ致シ政令已  
 レヨリ出テシメハ必スカヲ攘夷ニ用井ン故ニ孔子管仲ノ  
 器ヲ小トセシモ尙之ヲ稱シテ曰ク管仲微セハ我其レ被髮  
 左衽セント孔子ヲシテ管仲ノ地位ニアラシメハ必ス其爲  
 ス所ニ出テシヤ疑ナシ然レモ足跡天下ニ遍キモ遂ニ用ユ  
 ル所トナラス故ニ晩年ニ於テ春秋ヲ作レリ春秋ハ一國ノ  
 史乘ニアラスシテ天下ノ史乘ナリ是ニ於テ乎初メテ支那  
 國ト他國ノ間ヲ明カニシ同姓ヲ尊ミ異姓ヲ卑ミ我ノ君ヲ  
 錄セス君臣同辭ヲ用井其盟會ニ及ノ字ヲ書シ他ト區別ス  
 ル等ノ如ク戎狄ヲ卑ム者ハ是レ所謂中國ノ以テ背クヘカ  
 ラス夷狄ノ以テ嚮フヘカラサルヲ來シ支那全体ノ團結心  
 ヲ起サシムル者ナリ然レモ春秋ノ書其旨深遠高遠ニシテ  
 能ク凡人ノ得テ解スヘカラサル者ナレハ之ヲ日常平素ノ  
 間ニ講習セシメント欲ス是ヲ以テ古詩三百篇ヲ緝ムルヤ  
 問戎狄ヲ征スル語ヲ厠ヘ以テ之ヲ獎勵セリ六月ハ宣王ノ  
 北伐ヲ陳フル詩ナリ采薇ハ獫狁ヲ征スルノ詩ナリ小戎ハ  
 襄公ノ西戎ヲ討スルヲ美スル詩ナリ閟宮ハ戎狄ノ率服ヲ

頌スル詩ナリ蓋シ是レ孔子古人ノ語ヲ假リ國人ヲシテ之  
 ヲ誦シ之ヲ歌ヒ同類ヲ憐ンテ異種ヲ惡ムヲ猶人ノ善ヲ好  
 ンテ惡ヲ惡ムカ如ク其性情自然ノ正ニ基ツクガ如ク然ラ  
 シムルナリ而シテ管ニ此ヲ以テ其人ヲシテ戎狄ヲ憎ムノ  
 情ヲ増シムルノミナラス此レカ子孫ヲシテ戎狄ヲ憎ムノ  
 性ヲ以テ生ル、カ如クナラシメント欲スルナリ  
 前ニ言ヒシ如ク異種ヲ卑ムトハ前人ヨリ傳ハル者ニシテ  
 孔子ノ獨リ創メシ者ニアラス然レモ後世孔子ヲ以テ聖人  
 トナシ其言ヒシ所ノトハ可否善惡ニ關ラス皆確言トシテ  
 之ヲ遵守セリ故ニ孔子ヲシテ若シ和戎ヲ主張セハ假令先  
 人ノ言アリト雖モ誰カ之ヲ用井ル者アラン然ラハ則テ後  
 世異種ヲ憎ムノ情ヲ起セシハ是レ全ク孔子ノ賜ニシテ幸  
 ニ其一言ノ存スルニ因テ大ニ攘夷家ニカヲ添ヘ二千餘年  
 ノ末ニ至リテ屢勁敵ヲ塞外ニ退却セリ  
 又此情ヲ養ハント欲セハ周室ヲ永續セサルヘカラス何ト  
 ナレハ支那封建ハ周代ニ至リテ始メテ大成シ其國王ハ概  
 子周ノ子孫ナレハ其國政ノ齊整シ其民情ノ發育シ其文明  
 ノ成就セシハ皆之ヲ周代ニ歸セサルヲ得ス支那周室ハ歐



襄公ノ西戎ヲ討スルヲ美スル詩ナリ闕宮ハ戎狄ノ率服ヲ

ノ成就セシハ皆之ヲ周代ニ歸セサルヲ得ス支那周室ハ歐

洲封建時代ノ如ク其風俗民情ヲ皆後代ニ遺セシ者ナリ故ニ此周室ヲ破滅スルハ猶支那帝國ヲ破滅スルニ異ナラス此帝國ヲ永續セント欲セハ必ス周室ヲ永續セサルヘカラ

孔子ノ周室ヲ尊フコトハ世人ノ能ク知ル所ナレハ吾輩ノ贅言ヲ俟タス然レモ孔子ノ周室ヲ維持スル第一ノ策略ハ周ノ武王ヲ聖人トナスニ在リ夫君ヲ弑シ國ヲ篡フハ孔子ノ尤モ恥ツル所而シテ武王ハ明々ニ其君ヲ弑ス者ナリ而シテ之ヲ聖人ト謂フハ必ス深意アルナリ周春秋ノ末ニ至リ王室式微諸侯僭大王家ノ絶ヘサルコト縷ノ如シ誰カ之ヲ奪フ能ハザラン若シ武王ノ罪ヲ明カニセハ諸侯必ス之ヲ討スルヲ以テ名トナシ遂ニ周ヲ滅サン故ニ孔子ハ天下ハ重器王者ハ大統聖人ニアラザレハ取ル能ハサルヲ示スナリ然レモ尙逆賊ノアランコトヲ恐レ故ニ之ニ配スルニ伯夷ヲ以テス其意以テ聖人ニアラサルヨリハ湯武ノ權ヲ捨テ必ス伯夷ノ經ヲ取ランコトヲ要セリ是等ノ事ハ孔子周室ヲ維持スルノ策略而已ノ如クナレモ其結果ニ付テ論スレハ大ニ支那帝國ニ利アル者ト爲サ、ルヲ得ス

周世八百六十年ハ所謂支那帝國ヲ此間ニ成セシモノナレハ其周代ノ滅スルニ及テモ其風俗民情ハ容易ニ之ヲ動かス能ハス看ヨ元ノ如ク清ノ如ク舊ト夷狄ト稱セラレシ者ナレモ一旦帝國ニ入ルニ及ンテ此帝國ノ文明ヲ用井復ヒ他邦ヲ卑ンテ夷狄トス知ルヘシ此大國ヲ治ムルハ此策略ニ出テサレハ必ス之ヲ永續スル能ハス

又此邦ノ史乘ヲ閱スルニ或ハ分レテ鼎立シ或ハ離レテ雲攘ス四分五裂常ナシト雖モ毎ニ一統ニ歸スルノ傾キアリ是レ他ナシ此帝國ノ一家ノ如ク此人民ノ兄弟ノ如ク一時ノ憤怒ニ因テ分ル、モ親愛ノ情ハ尙爭鬪ノ中ニ顯レ一旦怒ノ霽ル、ニ及ンテ契約ナク誼盟ナク再ヒ手ヲ握ツテ一家ヲナスカ如キハ他ノ原因アリト雖モ一ツハ此情ノ然ラシムルナリ

スペンサー氏曰ク二邦ノ民其質甚異ナル者ハ其混襍適々滅亡ヲ速クニ足ルトドレバル氏曰ク羅馬ノ滅亡ハ東洋人ノ血ノ羅馬人ノ血ニ注キシヲ以テナリトシーマン氏曰ク邦國ノ鞏固ハ人民ノ血統關係其一原因ナリト古ヨリ外交ニヨリテ其國ヲ開キシ者ナキニ非サレモ此大國ノ地位ヲ



考へ其年代ノ形勢ヲ察セハ孔子ノ外人ヲ憎ミシハ豈ニ理  
由ニ近キ者ト爲サ、ルヲ得ンヤ是ニ由テ之ヲ觀レハ孔子  
ハ支那帝國ノ愛國者ニシテ其論說ハ支那當代ノ政略ナリ  
未開ノ時此大國ヲ維持スルニハ必ス其教ノ此一部ヲ行ハ  
サルヘカラス而シテ此帝國ノ今日ニ永續セシハ亦其教ノ  
此一部ノ實行ニ由ルナリ

通俗タルウ井ン進化ノ理(第四十五號ノ續キ)

駿臺 霞城山人稿

然レ此タルウ井ン以前ニ真正ノ知識ヲ妨害スル彼ノ地質  
轉覆ノ信仰モ論破セラレタリ此一大改革ノ偉功ヲ奏シタ  
ル人傑ハ實ニ英ノ地質家ジール、カルレス、リール氏ニシ  
テ氏ハ地質原論ト題セル書ヲ著ハシ的確ノ證據ヲ擧ケ地  
質ノ轉覆ト稱スル事ハ未タ曾テ地上一般ノ變タル跡ヲ見  
ス唯小區域ニ就テ之ヲ見ルノミ故ニ是レ一朝ニ地上ノ全  
面ニ暴發セシ變動ニアラスシテ却テ地球既往ノ經歷ハ陸  
續不斷徐々漸進ノ變遷ヲ經テ終ニ此結果ヲ積成シタル事  
ヲ論シ且ツ之ヲ積成シタル自然ノ諸力ハ今尙ホ現ニ地上

表面ノ形象ヲ變化シツ、アル諸原因ト同一ノモノタリ然  
レ其作用ハ極テ徐々ニ涉リ數千年ノ星霜ヲ經テ初テ目  
撃シ得ルノ度ニ達スルカ故ニ我輩短命ノ經驗上ヨリ之ヲ  
的證スルコト難シトマテ論及セリ

此說ハ正確ニシテ自然ノ理ニ適スルヨリ忽チ地質家一般  
ノ是認スル所トナレリ故ニ彼ノ地層ノ形質ニ變狀異態ア  
ル毎ニ生物維新ノ天命アリタリトノ理論ハ之カ爲メニ突  
キ倒サレ復タ起ツ能ハサルニ至ルヘク世ノ學者モ亦地質  
家ノ說ノ一變スルルハ地上有機界ノ成立及ヒ其變遷如何  
ノ事ニ就キ將ニ一大變動ノ起ラントスルヲ豫想シタリシ  
ヲ知ルヘシ然ルニ茲ニ大ナル困難アリ即チ舊ノ論說ニ代  
ヘルニ如何ナル新理論ヲ以スヘキヤト云フ事是ナリ蓋シ  
有機界成立ノ問題ニ關シテハ唯三理論ノ起スヘキモノア  
ルノミ即チ左ノ如シ

第一 前說ノ如ク地上ニ幾回モ生物維新ノ期アリシト  
云フ理論

第二 自然ノ原因ニヨリ有機界ツクチエシフノ繼發進化シタリト云  
フ理論



第三 自然力ノ媒助ノミニテ各生物(高等產物モ亦)ガ

隨時ニ自發成立スルト云フ理論

儲テ此三理論ニ就テ幾回モ生物維新ノ期アリシトノ理論

ノ既ニ不當ナルヲ知ルハ第二第三ノ理論ニ就キ何レカ

至當ナルヘキヤハ容易ニ之ヲ辨シ得ヘシ何トナレハ第三

自發的ノ論ハ自然力ノ媒介ノミニテ各種ノ生物ガ毫モ他

ニ成立ノ緣因ナク昔ト今トノ差別モナク獨自ニ發生シ得

ヘシト云フ事ニテ此論ハ學術上ノ才智ナキ人ト雖モ亦信

用シ能ハサル一大妄想ナレハナリ況ンヤ吾曹ハ有機界ニ

就キ實驗セシ諸般ノ事實ノ皆之レニ乖角スルヲ知ルニ於

テヲヤ然レモ此妄想モ亦學者社會ヨリ出テ且ツ此說ヲ信

仰シタル學者アリシハ余ノ長ク胸間ニ記セント欲スル所

ナリ例ヘハ前ニ擧ケタル英ノ有名ナル地質家ソール氏ノ

如キ其一人ニシテ曾テ此事ニ就キ概子左ノ如キ意ヲ演ヘ

タリ

經驗上ニ證シ得ル如ク生物種類ノ大數ハ斷ヘス滅亡ス

ト雖モ世界ノ空虛トナルコトナシ是レ其滅亡シタルノ地

ニハ更ニ自然力ノ作用ニヨリテ新種類ヲ生シテ彼レニ

代ハラシムルニヨル事萬々疑フ可カラス余輩ハ現ニ此

種類ヲ見テ新ニ發見シタルモノナリトスレモ必竟是レ

自然ノ理ニ沈ミタル昏迷ニシテ其實ハ是レ新ニ成立シ

タルモノナリ

此考案ハ實ニ獨リ自ラ是トスルマテニシテ少シク萬有ノ

理ヲ解スル者ハ直ニ其妄誕奇快ノ說タルヲ悟リ一ツモ理

論ノ頼テ以テ固立スヘキ柱石ナキヲ知ルヘシ乃チ有機物

ノ古來未ダ曾テ有ラサルモノ殊ニ高等ナル動物例ヘハ一

頭ノ獅々一匹ノ馬ガ毫モ他ニ因緣由來スルコトナリ單ニ今

日地上ニ行ハル自然力ノ集合作用ヨリ突然此ニ現出シ來

ルトハ幾様ノ思考ヲ費スモ到底信用シ能ハサルコトナリ

因テ考レハ更ニ他ニ満足スヘキ説明ナカルヘカラス但シ

此ノ説明ハ獨リ生物種類ノ新ニ成立スル事ヲ確定スルノ

ミニ止マラス其成立スル狀ニ就テモ精確ナル觀念ヲ置キ

其說ク所ノ事ハ皆今日ノ科學上ノ知識ト符合シ且ツ自然

力ノ作用殊ニ有機界ノ諸現象ニ就キ得タル所ノ事實ト一

致セサルヘカラス乃チ此至難ノ所望ハ余カ今日ノ講話ニ

於テ演ル所ノ一學者ニヨリ粗満足セシメラレタリ此人ハ



眞ニ近代ノ尤物ニテ雷名ヲ坤輿ニ轟カスカールス、ダ  
ウ井ン氏はナリ

氏ハ英國ノ萬有家ニテ夙ニ世ニ知ラレ千八百三十二年ヨ  
リ千八百三十七年ニ至ル英船「ベীগレ」號ノ有名ナル世  
界周航ニヨリ人ノ最モ尊敬スル所トナレリ氏ハ實ニ二千  
八百九年英國ノシリユスブライニ於テ生レ同國ノケント  
伯ノ領内フロンレーノ側ナルドウノ別荘ニ住シ身体ノ  
強壯ヲ閑靜ノ境ニ攝養セリ(以下次號)

○  
唯物論一斑

第一編 カト物質ヲ論ス 中川重麗抄譯

カハ衝突スル神ニモアラス又物ノ物質的ノ地ヲ離レタル  
本體ニモアラス無始無終物質ニ本在シタル性質ニシテ極  
天相離ルヘカラサルモノナリ物質ヲ辭シ去テ遊離スルカ  
アリトノ觀念ハ全ク一ノ空想ナリ窒、炭、水、酸及ヒ硫素、  
磷素性ノ性質ハ無始無終之レニ本在スルモノナリ(モレ  
シヨト)  
究竟如何ニ遡レハ力ナルモノモ物質ナルモノモアルナキ

ヲ知ラン此二者ハ相異ナル着眼點ヨリ取りシ抽象ナルノ  
ミ二者相合シテ初テ其物アリ之ヲ別テハ一ツモ存スルモ  
ノナシ物質ハ車ノ如ク力ノ馬アリテ之ヲ駕シ之ヲ牽クカ  
如キモノニアラス鐵ノ一微分子ハ永ク鐵ノ一微分子ナリ  
流星ノ体内ニ在テ宇宙ヲ環行スルモ瀛車ノ輪盤内ニ居テ  
軌道ヲ轉過スルモ血球ノ胞裏ニ潛ミ詩人ノ顛顛骨邊ヲ流  
通スルモ同シク是レ鐵ノ一微分子ナリ其性ヤ無限ナリ不  
易ナリ又他ニ移シ得サルモノナリ(ヅホイイス、リーモンド)  
世ニ余ヲシテ物体ナクシテ力ノ獨在スルト云フ事ヲ認定  
セシムルモノ一ツモアルナシ唯物体アリテ力ノ此ヨリ發  
動スルヲ知り唯物体アリテ力ノ此ニ作用ヲ及ホスヲ知ル  
(コッター氏)  
余輩ハ物質ノ根底ナクシテ力アリト思想シ得サルカ如ク  
力ノ幾何ヲ有セサル物質アルヲ知ラス(エフ、モール)  
物質ヲ離レテ特在スルカハ眞實コレアラス此二者相合シ  
テ此物体界アリ此物体界アリテ諸ノ現象ヲ呈ス物質ナク  
シテ力アルコトナク力ナクシテ現象アルコトナシ故ニ物質ナ  
クシテ現象アルヲ得ス(スヒレル)



究竟如何ニ迦レハ力ナルモノモ物質ナルモノモアルナキ

クシテ現象アルヲ得ス（スヒレル）

余輩ハ力ヲ有セサル物質アルヲ知ラス又之ニ反シテ物質ト結合セサルカアルヲ知ラス（ヘーゲル氏）

物質ヲ受動的ノモノトシ力其外ニ在テ作用ヲ此ニ及ホスナリトハ抑モ妄想ナリ此妄想ハ世襲及ヒ神妙教的ノ想像カアリテ精神ニ顔網ヲ被ラシムルニ非サレハ決シテ起シ得ヘカラス物質ノ力ニ於ケル肉身ノ靈魂ニ於ケル共ニ相離レタル本体ニアラス同一物ノ異態ヲ表示スルノミ（フヒクノート）

余ハ物質トカトハ合シテ相離レサルモノナリ力ハ物質ノ外ニ在テ獨立ノ存在ヲナシ能ハストノ大本ヲ信認ス（コル子リウス）

物質ヲ離レテ力アリ又力ヲ離レテ物質アリト想像セント欲スル諸ノ試験ハ偏頗一面ノ抽象ニ過キス是レ畢竟力又物質ト云フ言辭アルヨリ宇宙ノ間ニモ亦相異ナル二物ナカルヘカラストノ妄念ヨリ來ルモノナリ（ワイス）

學問ハ徹頭徹尾力ト物トハ合同シ相離ルヘカラスト云フ事ナリ（レフユレ氏）

余（ブフ子ル氏）ハ先ツ冒頭ニ右ノ如ク碩學鴻儒ノ語ヲ掲

ケ以テ第一編ノ端ヲ發カントス蓋シ第一編ニ論セントスルカト物トノ事タルヤ最モ單純ナル最モ樞要ナル然レモ却テ之レカ爲メニ今日尙纔ニ世ニ知ラレタル眞理ノ一ナリ余ハ之レヲ本論ノ柱石トシ漸ヲ逐ヒ次ヲ繼キコレカ經驗實證ヲ演ヘ以テ論歩ヲ進メントス

抑モ物ヲ離レテ力アルコナク力ヲ離レテ物アルコナシ或ハ其一或ハ他ノ一コレアリトハ決シテ思想スヘカラス又實ニコレアラサルナリ

假シ此ノ二者別自ニコレアリト思念センカ忽チ二者ハ共ニ空想虛念ニ陥ラサルヲ得ス唯此ノ二者別自ニコレアリトノ觀念ハ同一物ニ二様ノ觀ヲ下シテ現象ノ狀態ヲ譬考スルノ便ニ要スルノミ覆載ノ間實ニ此ノ如キモノアラサルナリ畢竟力ト物質トハ同一物ニテ唯見解ニ二面ノ觀ヲ下シ名ヲ別ツノミ余輩ハ此有形世界ニ物質ノ一微分子ト雖モ力ヲ有セス又力コレカ發動ノ因ヲナサ、ルモノアリト例證シ能ハサルナリ余輩ハ更ニ精密ニ觀察スレハ右ノ如クカナキノ物質ハ吾人ノ感覺機關タル五神ニ向テ感覺ヲ起シ得サルヲ知ル物質ハ唯獨リ物質中ニ本在スル力ノ



媒介ニ因リ五官ヲ刺戟シ感覺ヲ腦神ニ與フルノミ例ヘハ  
 茲ニ一塊ノ鉛アリ取テ之ヲ掌上ニ放ク地球ノ引力之レト  
 相牽クカ故ニ初テ重ノ感覺ヲ起スカ如シカナキ物質アリ  
 ト觀念セント欲スルモ到底得ヘカラサルヲ如何セン試ニ  
 又開闢ノ太初渾沌ノ元質アリシト思念スルモ其分子相互  
 ノ間ニハ牽引ト衝撞ノ二力系アルニアラサレハ開闢創世  
 ノ大業モ成就セサルヘク且ツカニヨリテ規律ヲ得制御ヲ  
 得タル分子相互ノ關係アルニ非レハ何ニ因テ以テ兩間ノ  
 萬物ヲ成形シ何ニ因テ以テ萬物ニ性質ヲ賦與シタルヤド  
 ロスバハ曰ク性質ナキ物ハ物ニアラス即チ虛無ナリ論理  
 上ニ實驗的ニ之アリト思想スヘカラス實證スヘカラスト  
 又ランゲル氏曰ク動ノ觀念力ノ觀念及ヒ體形ノ觀念ヨリ  
 物質ノ觀念ヲ分離セント欲スレハ物質ノ觀念ハ恰モ掬セ  
 ル水ノ如ク忽チ漏レ去テ痕ヲ留メスト  
 因ニ云フ以前ハ化學ヲ元素即チ物質ノ學問トシ物理學  
 ヲ力ノ學問トシ別チタレ其不當ナルヲ知り今ハ化學  
 ヲ以テ諸力ヲ講究スル普通物理學ノ一部トセリ蓋シ理  
 化ノ異ナル所ハ化ニ在テハ元素ノ元子理ニ在テハ同種

及ヒ異種ノ元子ヨリ成レル分子ニ就テ講究スルニ在リ  
 故ニ他ノ語ヲ以テセハ化學ハ元子ノ重學物理學ハ理學  
 ノ分子ノ重學ト云フヘキナリ  
 物質ナキ力ノ觀念ノ無有ナルト等シクカナキ物質アリト  
 ノ觀念モ亦然ラサルヲ得ス只前百年紀ノ冥想論家無學者  
 流ノミ此ノ宇宙ノ間ニ力ノ獨在スルヲ信仰シ敢テ物質  
 ト關係セス發動スルモノト想ヘリ今ヤ此ノ如キ妄想ハ既  
 ニ我學問ノ境外ニ放逐シタリ眞ニコレ一大事ナラスヤ力  
 ノ眞實特在スルト云フコトニ就キ之カ決定ヲナサシムル  
 モノ獨リ其性能ニ在リ獨リ其變化ニアリ獨リ其動象ニ在  
 リ之ヲ指テ他ニ求ムヘキモノ一ツモアルナシ此性ヤ此變  
 ヤ又此動ヤ皆是レ物質ニ就キ官能的ニ知覺シ得ル者ナリ  
 唯其現象ノ異同アルヨリカモ亦一ナラストシ種々ノ名ヲ  
 附シタルノミカノ特在ヲ認定スルノ道百方之レヲ研究ス  
 ルモ終ニ他ニ術ナキヲ知ル彼ノ電氣ナリ磁氣ナリ重力ナ  
 リ熱ナリ光ナリ又化學ノ親化力ナリ其他各種ノ力ノ現象  
 皆一ツモ物体ナクシテ思想スヘカラス分子ナクシテ思議  
 スヘカラス此各種ノ現象ハ唯物体ニ就テ驗スヘク分子相

互ノ交感ニヨリ性能ニヨリ之レカ原因ヲ致スヲ知ル然ル

移植傳達スルヲ得ヘシ故ニムルテ之ヲ說テ曰クカヲ



互ノ交感ニヨリ性能ニヨリ之レカ原因ヲ致スヲ知ル然ルニ此物体ナク此分子ナク彼ノ諸力ノ獨在ヲ思想セハ茲ニ殘ル所ノモノハ唯一ノ空思虛念ノミ唯一ノ之ヲ表示スル文字ノ名目ノミ此名目ハ只吾人ガ諸象ヲ講察スルニ當テ事ヲ便スル用アルノミ

力ノ特在スルトノ觀念ハ物質ノ獨在スルトノ觀念ニ等シク共ニ是レ實ナラス故ニ其意味ヲ更ニ嚴密ナラシメハ電氣ナルモノアルヲナシ唯發電ノ状態ニ變シタル物質アルノミ光ナルモノアルヲナシ唯發光顫動ノ状態ニ變シタル物体アルノミ温モ亦アルヲナシ唯元子或ハ分子ガ平均位ヲ得ンガ爲メニ顫動シ相互ノ地位ヲ變換スル物体アルノミ重力亦然リ唯引力ニヨリ壓力ヲ呈スル物体アルノミ其他ノ事一ツモ然ラサルハナシ

曾テ幽微玄妙ナル一物アルトシ之レニ不可秤物ノ名ヲ命シ以テ温光及ヒ電磁ノ力ヲ表示セリ然レ既ニ今日ニ至テハ此ノ如キモノナキヲ知リ其玄微不可思議ノ物ナリトセシハ却テ微細分子ノ交感作用ノ變態タルヲ知ルニ至レリ而シテ此變態ハ一物ヨリ他物即チ一物質ヨリ他物質ニ

移植傳達スルヲ得ヘシ故ニムルテ之ヲ說テ曰ク力ヲ創造シ力ヲ分與スル等ノ語アレ既決メ是レ然ル理由ナシ唯物質ノ作用ヲ借テ他ノ物質中ニ伏藏スル作用ヲ呼ヒ起スノミ人能ク磁氣ヲ傳フト云ヒ又傳ハルカ如ク見ユレ既是レ傳ハルニ非スシテ内隱セル作用ノ態ヲ變セシメタルノミ磁力ハ實ニ鉄ノ分子ニ本在シ相離レ去ルヘキモノナラスト又温ハ是レ萬有ノ大原力ナリ兩間ノ諸現象ニ發動シ何ノ處ニモコレナキハナク何ノ時ニモ亦コレナキハナシ其變スルヤ他ノ自然ノ諸力トナリ其復スルヤ舊状態ノ温トナルヲ人ノ既ニ知ル所ナリ是レ曾テ妄想セシ如ク物体ヲ出テ去テ物体ニ竄入スル一種玄微ノ温素ナルモノアルニアラス物体ノ元子或ハ分子ノ運動ナリ其運動ハ一種絶快ノ顫動ナリ回轉ナリ波動ナリ而シテ此時分子相互ノ距離ハ多少擴大シ之ニ反シテ寒冷ノ態ニ在テハ其距離却テ小縮ス温ト寒トハ唯此運動ノ異狀ニ過キズ比較上所謂寒冷ナル物体ノ顫動ハ其勢力微弱ニシテ熱物体ノ顫動ハ勢力強大ナリ温ノ能ク物質ヲ膨大セシメ寒ノ能ク之ヲ收縮セシムルモ此ニ因ルナリグロフ<sup>エ</sup>氏曾テ自然力ノ親密



ト題セル書ヲ著シテ曰ク余ハ世上一般ニ温ナル語ヲ以テ表示スル所ノモノハ物質ノ一定ノ變化ヨリ他ニ温ト稱スヘキ者ヲ見スト光モ亦然リ輓近ノ觀察ニ從ヘハ温ト同一ノモノトセリ唯其異ナルハ「エーテル」ノ顫動數ト此顫動ヨリ惹キ起サレシ物体分子顫動數ノ等差如何ニ在ルノミ曾テ信認シタルカ如ク不可秤的ノ彼ノ光素ナル者アルニアラサルナリ一種ノ未タ團結セス極微極精ノ態ヲ占メ此宇宙ニ填充シ萬物ノ間ニ竄透シ光「エーテル」ノ名ヲ附セル物質元子ノ極テ神速ナル波動形ノ顫動ナリ是レ吾人ノ視官ニ上リ赫々ノ光明ヲ感セシムルモノナリ而シテ其顫動ノ稍態ヲ異ニスルモノ是レ即チ温ト呼ヒ熱ト感スル現象ナリ其他電氣ナリ磁氣ナリ化學ノ親化ナリ皆此顫動ヨリ發現スル異態ノ結果ナルヲ知ル又此ノ顫動波及ノ状態ニ最モ能ク類似スル彼ノ響ナルモノモ響素ナルモノアツテ空氣ノ中ヲ經過シ耳内ニ鑽入スルニアラス唯空氣自体ノ顫動ニシテ波及遞傳終ニ鼓膜ヲ鼓動シテ響ヲ感覺セシムルモノナリ

(以下次號)

道義一定ノ紀律ナキ所以ヲ論ス(承前)寺山啓之助稿  
若シ果シテ道義体形ノ基本ハ便宜上ヨリ成立スル者トセハ道義ト便宜トノ間ニ密着ノ關係ヲ有スルコト余ノ説明ヲ俟タスシテ認メ得ヘキ者ナリ畢竟スルニ便宜カ變遷ノ程度ヲ止メテ常住不變ノ極点ニ達セサル以上ハ道義ノ一定モ亦決シテ期望スヘカラス今ノ社會ニ現出スル萬般ノ顯象ハ果シテ變遷ノ程度ヲ止メタルカ常住不變ノ点ニ達シタルカ否然ラス今ノ社會ハ變遷又變遷シ進化又進化シテ曾ツテ程度ノ若干分ヲ減殺シタルコトナキノミナラス益々迅速ニ優勝劣敗優制劣從ノ行ハル、者ナリ此際ニ當リテ道義ノ一定ヲ期望スルハ猶ホ西比利亞人ニ必要ナル温袍ヲ印度人ニ着裝セシムルト同一理ニシテ迂濶ト評セサルヲ得ス  
今社會間ニ發表スル事實ニシテ殊更ニ吾人ノ感覺ニ便不便ノ差異ヲ感セシムル所以ハ何ンテ有ルカ蓋シ此源因タル實ニ夥多ニシテ活物死物ヲ問ハス有形無形ニ論ナク寰宇萬象ハ悉皆便不便ヲ發生スルノ媒介タラサルハナケン  
余ハ是ニ於テ尤モ適切ニ人心ヲ感觸シ尤モ道義不定ヲ懲

通スヘキ事物ヲ蒐集シテ一表ヲ作ルノ止ムヲエサルニ際

炭ヲ焚ヒテ暖熱ヲ取ルノ策ナク一年又一年刻苦焦心スル



余ハ是ニ於テ尤モ適切ニ人心ヲ感觸シ尤モ道義不定ヲ懲

通スヘキ事物ヲ蒐集シテ一表ヲ作ルノ止ムヲエサルニ際  
會セリ然レ余ノ淺學寡聞ナル充分蒙羅シ盡スコト能ハサ  
ルナラン假令或ハ是ヲ爲シ得ルモ叙記序ヲ紊レ事實眞ヲ  
失フノ誤謬ヲ免カレサル也看官夫レ之ヲ諒セヨ  
其ノ綱領ヲ大別シテ二トナス

(甲) 天然ノ異同

(乙) 人爲ノ異同

天然部ニ屬スル便不便ハ多年ノ習慣性トナリ吾人ノ忍耐  
スヘカラサル場合ニ遭遇若クハ居住スト雖モ殆ント心身  
ニ感セサルカ如シ然レモ隱然道義ノ不定ヲ助成シ且ツ人  
爲部ノ異同ヲ醸生スル媒介トナルヲ以テ勢ヒ等閑ニ付ス  
ル能ハサルナリ此部ヲ分チテ六ヶ條ト爲ス

第一氣候ノ差異○氣候ニ三大區別アリ曰ク  
曰ク溫帶是ナリ而シテ此等ハ皆ナ間接ニ道義不定ヲ促ス  
者タリ例ヘハエスキモ一種其他或ル種屬ノ如ク北方烈寒  
ノ地ニ生活スル生民ハ常ニ冰雪ヲ以テ家屋ヲ作り暖熱ヲ  
取ルノ工夫ハ只魚油ヲ燈ホシテ微温ヲ感スルノ一点ニ止  
マリ寒氣轉々酷烈ニシテ肌膚ヲ裂カントスルモ爲メニ薪

炭ヲ焚ヒテ暖熱ヲ取ルノ策ナク一年又一年刻苦焦心スル  
所ハ唯防寒ノ一事ニシテ毫モ社會ヲ改良シ及ヒ發達セシ  
ムルノ餘力ナシト云ヘリ是ト同シク熱帶地方ニ住スル人  
類モ亦真正ノ幸福ヲ享有スルコトアタハス但シ此地方ハ元  
來天然ニ富ミ各人勞セスシテ繫命スルコト極メテ容易ナル  
ヲ以テ若クハ諸般ノ感情急疾ニ發達スルヲ以テ古代文明  
ノ原造ハ却テ此地方ニ在リキ印度、東甫塞、三維斯諸島及  
ヒ白露、墨西哥等ノ如キ以テ証スルニ足レリ然レモ此ノ  
地方ノ常例トシテ漸々懶惰ノ習慣ヲ生シ精神ヲシテ萎靡  
不振ノ弊ニ陥ラシメ終ニ永恆文明ヲ維持スルコト能ハサ  
ルニ至ル生ヲ溫帶地方ニ享ル者ハ全ク右二者ト異ニシテ  
萬事天然産ニ依頼スルアタハス饑寒ノ愁常ニ脚底ニ往來  
セリ故ニ拮据奮進シテ自ラ耕織ヲ務メサルヘカラス其結  
果タルヤ社會改良シ人智發達シ遂ニ無上ノ幸福ト不二ノ  
生活トヲ享受スルニ至ル夫レ此ノ如ク氣候ノ差異ニ因リ  
テ人類ノ生活ヲ導クコト區々同シカラストセハ一步進  
テ道義亦不定ナラサル可カラストノ考察ハ決シテ間然ス  
ヘカラサル者ナリ



第二地味ノ豊瘠○地味ノ異同ヨリ生民ノ感覺ニ便不便ヲ

生スルコト均シカラス誌ニ稱スマダカスカル、サマトラ

等ハ地味豊饒ニシテ一粒ノ米ヲ播ケハ常ニ百粒内外ノ收

穫アリト此ノ如キ地方ニ生活スル生民ト瘠确不毛ノ北極

地方若クハ亞非利加内地ノ沙漠近傍ニ生息スル人民トヲ

比較セハ各倫理ノ一定セサルコト疑ヲ容ル可カラス

第三地勢ノ高低○忽ニシテ海忽ニシテ山忽ニシテ江河忽

ニシテ原野地面ニ巨多ノ異同ヲ有スル邦土即チ希臘、伊

太利、埃及ノ如キト少數ノ差異ヲ有スル亞非利加諸邦ノ

如キト各生民ノ心機ヲ刺撃スル所決シテ同カラサルナラ

シ殊ニ山嶽ノ布置如何ニ由リテ來ル所ノ結果ハ更ニ甚タ

シキ者アリ概シテ高山大嶽ノ周圍ヲ回繞スル邦土ハ自然

内部外部ノ關係ヲ軟弱ニシ一種特異ノ状態ヲ鑄成スル者

ナリ或ハ常ニ一種族ヲ養生スルニ適シテ敢テ闔國一人ノ

首領ヲ奉戴スルコト能ハサルノ事情アリ往古ウエルス國

カ險ニ據リ柵ヲ構ヘテ八百年間英政府ニ抵抗シタルカ如

キ其一例ナリ夫レ斯ノ如キト平曠一面ノ土地ニ繫命スル

生民トハ便不便ノ感情必ス異ナルナラン故ニ曰ラク地勢

ノ異同モ道義不定ノ一原因ナリト

第四河海ノ異同○此ノ關係ハ凡テ前項ニ齊シ且ツ前條述

フル所ノ高山峻嶽及ヒ大海巨河等凡テ廣大ナル顯象ハ人

類ノ豫想力或ハ感覺力ニ大影響ヲ及ホス者タリ支那古今

ノ文章家カ比々之ヲ唱ヒテ玉詩佳文ノ評語ヲ下スカ如キ

ハ多年ノ經驗ヨリ得ル所ナラン

第五動物ノ利害○動物ヲ以テ日常ノ食餌トナシ或ハ動物

ヲ使用シテ生計ヲ營ナムノ社會ニ在リテハ動物ノ増減殊

ニ緊要ニシテ若シ缺乏スルコトアレハ生民ノ不便ヲ感ス

ルコト是ヨリ甚シキハナシ然レモ動物ノ爲メニ慘害ヲ被

ムルノ邦土ニ於テハ其侵掠ヲ防クヲ以テ第一ノ業務トナ

シ社會交通ノ便宜ヲ阻絶スルコト淺少ナラス東西方今ノ

記録ヲ按スルニ虎、狼、豺、熊、蟒蛇、蚊蚋、蟻蝻、若クハ「ラ

イオン」若クハ「コロコダイル」等ノ爲メニ禍害ヲ被ムル

者其例ニ乏カラス今其二三ヲ話説セハ左ノ如シサマトラ

及ヒ印度ハ種々ノ動物ヲ産スルコト夥シク同時ニ生民ノ

禍害ヲ招クコト尠シトセス就中印度ノ如キハ曾ツテ一雌

虎ノ爲メニ百有餘ノ人民ヲ殺害シ及ヒ多數ノ田畝ヲ蹂躪

セリト云フ又最近ノ官報ニヨレハ人類ノ爲メニ落命セシ

最モ眼目トスル所ハ色素ヲシテ織緯ニ能ク固着セシメ水



生民トハ便不便ノ感情必ス異ナルナラン故ニ曰ラク地勢

虎ノ爲メニ百有餘ノ人民ヲ殺害シ及ヒ多數ノ田畝ヲ蹂躪

セリト云フ又最近ノ官報ニヨレハ人類ノ爲メニ落命セシ者○蛇一萬九千五百十九人○虎八百九十五人○狼二百七十八人○豺二百七人○象六十人家畜ハ併セテ四萬六千七百十頭ナリ而シテ同年中狩取リタル猛獸ハ總數三十三萬五千七百二十七頭ニシテ此賞金ハ一萬四千六百六十五磅六志ナリト云フ我國內部ニ於テハ幸ニシテ猛獸ノ爲ニ注意ヲ要スヘキコナシト雖モ北海道諸國ハ熊ノ爲ニ往々田畝家獸ヲ失ナフコアリ又沖繩縣ニ於テハ多クノ毒蛇ヲ生シ人若シ之ニ觸レハ瘡ユル者尠シト云ヘリ此等ハ激烈ニ人心ヲ刺衝シ道德不定ヲ慫慂スル者ナリトス (以下次號)

理醫學講談會筆記

染物ノ話

高松豐吉君述

凡テ色染シタル糸類又ハ織物ノ中ニハ水ニ投スルモ褪色セザルモノト又容易ニ褪色スルモノトノ二種アリ此水中ニ於テ褪色セザルモノハ眞ノ染色ニシテ其色素ノ能ク纖維ニ固着シタルモノナレモ容易ニ褪色スルモノニ於テハ唯々纖維ノ表面ニ色素ヲ塗抹シタルカ如キモノナレハ之ヲ塗物ト云フモ敢テ過言ニアラザルベシ左レハ染色術ノ

最モ眼目トスル所ハ色素ヲシテ纖維ニ能ク固着セシメ水洗スルモ容易ニ褪剝セザル染色ヲ得ルニアルナリ而シテ此目的ヲ達センニハ先ツ其染メルベキ纖維ノ性質ト之ニ使用スル色素ノ性質ハ勿論亦其纖維ノ色素ニ於ル關係等ヲ豫メ熟知セザルベカラズ通常余輩カ使用スル糸織物ノ中ニハ絹、毛ノ如キ動物質ノ纖維アリ又木綿、麻ノ如キ植物質ノ纖維アリ此二種ノ纖維ハ相互ニ其性質ヲ異ニスルノミナラズ亦同種類ノ中ニテモ絹ト毛トハ恰モ木綿ト麻トニ於ルガ如ク多少性質ノ異ナル所アリ而シテ通常使用スル所ノ色素ノ中ニハコチニールト云フ蟲ノ如キ動物質ノ者アリ藍、蘇木等ノ如キ植物質ノモノアリ、ベンガラ、クロム黃ノ如キ礦物質ノモノアリ其他種々人造ノ染粉ノ如キ主トシテ炭素水素酸素窒素ヨリ成立スル所ノ有機質ノ者アリテ各々其性質ヲ異ニスルコト恰モ各種纖維ノ性質ヲ異ニスルガ如シ然ラハ其性質ノ異ナル色素ノ一ヲ取り之ヲ一種ノ纖維ニ染付ケ水洗スルモ褪剝セサル様ニナスハ最ト六ヶ敷事業ナレモ我國ニ於テハ往古ヨリ染色術ニ熟達シ是レ迄眞ノ染物ヲ製出シタルモノハ蓋シ實驗上ヨリ



自然色素ト纖維ノ性質ヲ知リテ染方ノ宜シキヲ得タルモ

ノナルベシ然ルニ近年歐米諸國ヨリ種々ノ染料ヲ我國ニ  
輸入シ其色甚タ美麗ニシテ且用方ノ便ナルカ故ニ染業家

ハ競テ之ヲ從來ノ染草ニ代用セントシタルモ如何セン其  
色素ノ性質ヲ熟知セサレハ固ヨリ眞ノ染料ヲ得ル能ハス

シテ終ニ不充分ナル染料ヲ販賣シ之カ爲メ近年該業ノ聲  
價ヲ失スルニ至リタルハ甚タ惜ムベキナリ

余ハ爰ニ化學ト染色術ノ關係ヲ示サンガ爲メニ二三ノ例  
ヲ舉ケテ染方ノ理ヲ説明セントス

凡ソ諸般ノ纖維ニ色素ヲ固着スルニハ其法主モニ化學ノ  
理ニ基クモノニテ或ハ簡單ナル法アリ或ハ然ラサルモノ

アレモ概子左ノ五類アリ  
(一)纖維ト色素トノ互ノ引力ニ由リテ染ムルコト

(二)水ニ溶ケザル色素ハ藥品ヲ以テ之ヲ溶解シ其溶液ヲ  
纖維中ニ吸收セシメ然後再ヒ不溶性トナスコト

(三)媒染劑ヲ以テ纖維ヲ染メ之ヲ色素ノ溶液中ニ投シ以  
テ其色素ヲ纖維中ニ沈澱セシムルコト

(四)藥品ノ化學變化ニ由リテ纖維中ニ色素ヲ發生セシム

ルコト

(五)不溶性ノ色素ヲ蛋白質ト混合シテ纖維ニ附着シ蒸熱  
シテ蛋白質ヲ凝固セシメ同時ニ其色素ヲ纖維ニ固着

セシムルコト

第一項ノ染方ハ最モ簡單ナルモノニシテ唯々纖維ト色素

トノ間ニ充分ノ引力アリテ共ニ抱合スルノ性質アレハ即  
チ眞ノ染料ヲ得ルナリ然ラハ如何ナル纖維ト如何ナル色

素トノ間ニ如此キ引力アルヤト云フニ凡ソ絹毛ノ如キ動  
物質ノ纖維ハ能ク色素ヲ吸收スルノ力アリ之ニ反シテ木

綿麻ノ如キ植物質ノ纖維ハ一般ニ色素ヲ吸收スルノ力甚  
タ少ナシ又前ニ述ヘタル種々ノ色素ノ内アニリン色素即

チ染料ノ類ハ絹毛類ニ吸收セラル、ノ性質アルモ木綿類  
ニハ然ラズ故ニアニリン色素ヲ以テ絹毛類ヲ染ムルハ最

モ容易ナルコトナリ即チ左ノ試驗ニ由リテ之ヲ証明スベシ  
(第一試驗)紫粉ノ溶液ヲ一器ニ盛り豫メ水ヲ以テ洗ヒ

タル絹地一ト切ト木綿地一ト切ヲ此中ニ投シ攝氏七八  
十度ノ温度ニ之ヲ熱スルルハ絹地ハ漸々色素ヲ吸收シ

テ能ク其色ニ染マル木綿地ハ然ラズ但其表面ノ薄紫色

トナルノミ今此二品ヲ色素ノ溶液中ヨリ取出シ冷水ヲ

トナルノミ今此二品ヲ色素ノ溶液中ヨリ取出シ冷水ヲ



(四)藥品ノ化學變化ニ由リテ織緯中ニ色素ヲ發生セシム

テ能ク其色ニ染マル木綿地ハ然ラズ但其表面ノ薄紫色

トナルノミ今此二品ヲ色素ノ溶液中ヨリ取出シ冷水ヲ以テ洗滌スレハ絹地ノ染色ハ褪剝セザレモ木綿ニ附着シタル色ハ漸々褪剝スベシ

右アニリン色素ト云フ染粉類ハ皆西洋諸國ヨリ輸入スル者ニシテ之ヲ製造スルノ原品ハ石炭テール即チコールタ  
ナリ昨年余カ本會ニ於テ石炭瓦斯ノ説ヲ講シタル所陳述シタル如ク石炭ヲレトルトニ入レ蒸溜スル所ハ三種ノ物ヲ得即チ石炭瓦斯、石炭テール及ヒコールクナリ此石炭テールト云ヘルモノハ黑色ノ油ニシテ其中ニ種々ノ油ヲ含有ス是レ皆蒸溜ノ際石炭ノ分解ニ由リテ發生シタルモノナリ扱此黒キ油ヨリ如何ニシテ美麗ナル染粉ヲ製造スルヤト云フニ其法何レモ化學ノ理ニ基クモノニ容易ニ之ヲ説明スルヲ能ハザレハ今之ヲ略シ唯々テール油ヨリ紅粉ヲ製造シ得ル簡單ノ試験ヲナスベシ先ツ石炭テールヲ蒸溜スレハ種々ノ油ヲ得ル其中ニベンジント唱フル輕キ油アリ之ヲ他ノ油ヨリ分離シテ次ニトロベンジント云ヘル油ヲ製出ス是レ通常石鹼ニ香氣ヲ附スルニ用フル油ナリ而シテ此ニトロベンジンヨリアニリント云ヘル油

ヲ製シ然後此アニリンヲ以テ染粉ヲ製造スルナリ

(第二試験)紅粉ヲ製造スルニハ純粹ノアニリン油ニトリウヂント云ヘル油ヲ混合シ之ニ適量ノ砒酸ト水ヲ混和シ暫時熱スル所ハ其油ハ漸々赤色ニ變シ終ニ赤黒キ飴ノ如キモノヲ得然ル所之ヲ放冷シ少許ノ酒精ト水ヲ加フレハ赤色ノ溶液ヲ得是レ即チ紅粉ノ溶液ナリ

右試験ニ用ヒタルトリウヂント云フ油ハ亦アニリン油ノ如ク石炭テールヨリ製出スルモノニテ通常世間ニ販賣スルアニリン油ノ中ニハ多少此油ヲ混合スルナリ扱右ノ法ニ由リテ紅粉ヲ製造シ其能ク精製シタルモノヲ染料ニ用フ又紫粉、紺粉、綠粉ノ如キハ此紅粉ヨリ製造スルモノニシテ其他猶ホ數十種ノ染粉アレモ皆石炭テールヨリ製造スルモノナリ

第二項ノ染方即チ水ニ溶ケザル色素ハ藥品ヲ以テ之ヲ溶解シ其溶液ヲ織緯中ニ吸收セシメ然後再ヒ不溶性トナス  
コノ例ハ通常染物屋ニ於テ實行スル藍ノ染方ナリ

青藍ハ水ニ溶ケザルモノナレモ若シ之ニ灰汁、石灰、綠礬又ハ麥粉ノ如キモノヲ混合シテ熱スル所ハ漸々青藍ノ質



ヲ變シ白藍ト名クル一種ノ化合物ヲ生ズルカ故ニ能ク灰汁ニ溶解ノ黃色ノ液ヲナス是レ即チ藍ノ溶液ナリ却說白藍ノ性ハ空氣ニ觸レ合フレハ忽チ空氣中ノ酸素ヲ吸收シ元ノ青藍ニ變シ不溶性トナルモノナレハ先ツ其染メントスル所ノモノヲ白藍ノ溶液中ニ浸シ然後之ヲ引上ケ空氣ニ曝セハ酸化シテ青色ヲ發ス若シ其濃色ヲ得ント欲セハ又之ヲ藍ノ溶液中ニ浸シ再ヒ空氣ニ曝スベシ如此スレハ纖維中ニ不溶性ノ藍ヲ生スルカ故ニ之ヲ水洗スルモ褪色スルヲナク即チ眞ノ染物ヲ得ルナリ

紅ハ紅花ヨリ得ル一種ノ染料ニシテ往古ヨリ廣ク需用ス此色素モ亦藍ノ如ク水ニ溶ケザルモノナレハ灰汁ニ溶解シ黃色ノ液ヲナス若シ此液ニ酸類ヲ加フレハ再ヒ紅ノ色素ヲ沈澱スルガ故ニ今染メントスル物ヲ紅ノ溶液中ニ浸シ然後酸類ヲ混加スレハ纖維中ニ於テ不溶性ノ紅ヲ生スルガ故ニ水洗スルモ褪色セズ即チ眞ノ染物ヲ得ルナリ

第三項ノ染方ハ媒染劑ヲ以テ纖維ヲ染メ之ヲ色素ノ溶液中ニ投シ以テ其色素ヲ纖維中ニ沈澱セシムルナリ例ヘハ蘇木ノ中ニ赤キ色素アリテ能ク水ニ溶解スレハ此色素ノ

溶液ヲ以テ直ニ纖維ヲ染ムルヲ能ハズ然レモ其溶液ニ明礬又ハ醋酸礬土ノ溶液ヲ加フレハ礬土ト蘇木ノ色素ト化合シテ不溶性ノレキ色素ヲ生スルガ故ニ先ツ醋酸礬土ノ溶液ヲ以テ纖維ヲ染メ然後蘇木ノ煎汁ニ之ヲ浸スレハ纖維中ニ不溶性ノ色素ヲ生スルヲ以テ眞ノ染物ヲ得ルナリ此ノ如キ染方ニ於テ醋酸礬土ハ纖維ト色素ノ中間ニ在リテ色素ヲ助クルカ故ニ之ヲ媒染劑ト云ヒ又俗ニ色留藥ト云フナリ

又ロクウーフト云ヘル木皮ノ中ニ一種ノ色素アリテ水ニ溶解スレハ是亦直チニ纖維ヲ染ムルニ適セズ然ルニ此溶液ニ明礬ヲ加フレハ紫色ノ沈澱ヲ起シ鉄液ヲ混スレハ黑色ノ沈澱ヲ生シ其他丹礬、鹽化錫、石灰水等皆特種ノレキ色素ヲ沈澱スルガ故ニ是等ノ媒染劑トロクウーフトノ煮汁ヲ以テ種々ノ色ヲ染ムルヲ得ベシ

爰ニ又アリザリント云ヘル色素アリ此色素ハ茜ニ類スル草ノ根ニアリテ專ラ赤染ニ用フルモノナレハ近年迄西洋諸國ニ於テ此茜草ヲ多ク培養シテ染料トナシタルガ今ヨリ十六年前獨乙國ノ化學者ガ石炭テール中ニ含有スル一



蘇木ノ中ニ赤キ色素アリテ能ク水ニ溶解スレバ此色素ノ

リ十六年前獨乙國ノ化學者ガ石炭テール中ニ含有スル一

種ノ油ヨリアリザリンヲ製造スルコトヲ發明シ續テ其製法  
ヲ改良セシ以來益々アリザリンノ製造盛ンニ行ハレ其代  
價モ亦隨テ下落シタルヲ以テ現今ニテハ主モニ此人造ア  
リザリンヲ染料ニ用フルナリ扱アリザリンノ性質ハ水ニ  
溶解シ難ク又直接ニ纖維ヲ染ムルニ適セザレバ豫メ明礬  
或ハ醋酸礬土ヲ以テ纖維ヲ染メ然後之ヲアリザリンノ液  
中ニ熱スルキハ赤色ヲ生シ又礬土ニ代フルニ鉄液ヲ以テ  
スレハ藤色ヲ得ルナリ目下世間ニ廣ク用フル所ノ緋金巾  
ハ一種ノ油ト醋酸礬土ヲ媒染劑トシアリザリンヲ以テ染  
メタルモノニシテ其色美シク且ツ容易ニ褪色スルコトナシ  
既ニ第一ノ試験ニ由リテ証明シタル如クアニリン色素ヲ  
以テ直テニ木綿ヲ染ムルコト能ハザレバ豫メ適宜ノ媒染劑  
ヲ以テ木綿ヲ染メ然後之ヲアニリン色素ノ溶液中ニ投ス  
レハ恰モ絹ヲ染ムル如ク色素ヲシテ纖維ニ能ク吸收セシ  
ムルコトヲ得ルナリ但シ其媒染劑タルベキモノハタンニン  
質第一鹽化錫吐酒石ノ如キ能クアニリン色素ト化合シテ  
不溶性ノ色素ヲ造ルモノヲ用フベシ  
第四項ノ染方ハ藥品ノ化學變化ニ由リテ纖維中ニ色素ヲ

發生セシムルコトナリ例ヘハ醋酸鉛ト重クロム酸ポタシユ  
ムノ各溶液ハ纖維ヲ染ムルニ適セザレバ若シ其二液ヲ混  
合スレハ黃色クロム酸鉛ノ沈澱ヲ生スルガ故ニ此法ニ由  
リテ纖維ヲ黃色ニ染ムルコトヲ得ベシ  
〔第三試験〕醋酸鉛ヲ混合シタル糊ヲ以テ木綿地ニ摸樣  
ヲ刷リ然後炭酸ソーダノ溶液若シクハ稀硫酸ニ浸シテ  
糊ヲ去リ又重クロム酸ポタシユムノ溶液中ニ投スレハ  
白地ニ黃色ノ摸樣ヲ得ルナリ  
又第一鐵青酸ポタシユムノ酸性溶液ニ第二鹽化鐵若クハ  
硝酸鐵ノ溶液ヲ加フレハ青色ノ沈澱ヲ生ス是レ即チベル  
藍ナリ故ニ左ノ法ニ由リテ木綿地ヲ青色ニ染ムルコトヲ得  
ベシ  
〔第四試験〕硝酸鐵ヲ混合シタル糊ヲ以テ木綿地ニ摸樣  
ヲ刷リ然後石灰水若クハソーダノ溶液ニ浸シテ糊ヲ去  
リ又第一鐵青酸ポタシユムノ酸性溶液中ニ投スレハ白  
地ニ青色ノ摸樣ヲ生スルナリ  
第五項ノ染方却チ蛋白質ヲ以テ不溶性ノ色素ヲ纖維ニ固  
着スルコトハ通常更紗染ニ用フル法ニシテ例ヘハ紺青ノ如



キ土画ノ具ヲ織緯ニ染付ケント欲セハ先ツ之ニ蛋白質ト粘ヲ混シテ木綿地ヲ捺染シ然後水蒸氣ヲ以テ之ヲ蒸熱スレハ其蛋白質ノ凝固ニ由リテ色素ヲ織緯ニ固着スルナリ以上陳述スル所ハ色染一般ノ方法ニ就キ二三ノ例ヲ舉テ其大意ヲ解説シタルマデノコニテ固ヨリ粗漏ヲ免カレザレモ之ヲ要スルニ色染法ハ專ラ化學ノ理ニ基クテ明瞭ナリ左レハ世ノ染業家ハ能ク化學ノ理ヲ應用シ益々従前ノ法ヲ改良シ或ハ新法ヲ發明シテ後來眞實ノ染物ヲ製出スルニ盡力アラント余カ切ニ希望スル所ナリ

雜報

○ダールウ井ン記念金 先に進化論の始祖故ダールウ井ン氏の記念の爲めに義捐金を醸むるの舉ありと聞き一か今度右義捐金使用の方法ヲ付き委員會に於て決議せる事項ハ第一ダールウ井ン氏の石像をブリチス、ミュージアム英國第一の博ふ献納する事第二石像及び賞牌製造の入費並み諸雜費を差引き殘金をダールウ井ン資金と名けて學士會院ロイヤルソサエチーに送り之を或慥かなる所に預け置かしむる事第三右預金より生ずる利子は同院の會頭及び議員の見込にて最も生物

學研究上に裨益ありと認むる事に使用す可き事第四出金者姓名入費仕譯決議の次第及び石像ノ圖等ヲ出版に附す可き事なりしと子一チユア新聞に見へたり

○菊地大麓氏 去年米國ワシントン府於て開設したる子午線會議へ我邦より委員として出張されたる同氏ハ其序を以て英米其他歐洲諸國の學事巡視を遂げられ去月廿一日無事歸朝されたり

○醫學士小金井良精氏 是獨乙伯林府留學中同府大學校解剖學教授ワルダイヤ一氏の第二助教に舉られし事は本誌第三十號に掲載せしか同氏は去月廿一日歸朝せられ本月一日文部省に於て東京大學御用掛醫學部勤務仰付られたり

○鑛物學初步 東京大學講師小藤文次郎氏ハ曩に著述せられし金石學を敷衍して題號の如き書を著はされ今回其上卷を刊行せられたり同書ハ世上に行はる、専門家ニ非ざる人の無暗に翻譯したる教科書の類に非らず其趣旨たる所ハ同氏序文ニ明らかなれば之を左ニ抄録す

(前略) 現時本邦ニ行ハル、鑛物學書其類多シト雖モ皆

同一ノ模範ニ出テ、徒ラニ夥多ノ鑛物ヲ記相シ其功用

期會を開く筈の所今夏休業中ニ理學部を本郷ニ移轉さる



生する利子は同院の會頭及び議員の見込にて最も生物

(前略) 現時本邦ニ行ハル、鑛物學書其類多シト雖モ皆

同一ノ模範ニ出テ、徒ラニ夥多ノ鑛物ヲ記相シ其功用ヲ舉クルニ止マリ更ニ鑛物界ト生物界トノ關係物理及ヒ化學ノ情性ヲ詳論シ自然ノ法則ヲ尋繹スル書アルヲ聞カス嘗々鑛物學ヲ死態ニ攷修シ天地自然ノ原理ヲ推覈シ以テ活態ニ研學スルノ道ヲ知ラス之レ死態鑛物學ヲ最良ト誤認スルニ根據セリ鑛物學モ理學諸科ト均シク近時著シキ變遷ヲ經過シ今日ノ鑛物學ハ鑛物ノ記相學ニ非ラスシテ鑛物生理學ト變態セリ故ニ此書主トシテ鑛物ノ生理ヲ論シ上卷ト爲シ下卷ニ於テ鑛物ヲ記相セムトス(以下略)

○蠶の蛆 理學士佐々木忠二郎氏か蠶の蛆ふ就き深く研究せられ頗る好結果を得られしは既に數回本誌に舉たる同氏の論說にて讀者大略了知せらる、所ならん今回同氏は右研究中實地養蠶に必用なる部丈を平假名まじりの極く平易なる文にて記せられ題號の如き小冊子を出版せられたり養蠶家欠く可らざるの書なり該書は丸善おて發賣し其定價ハ十五錢なりと云ふ

○理醫學講談會 同會は來る九月第三土曜日を以て第四

期會を開く筈の所今夏休業中ハ理學部を本郷小移轉さるゝよ就てハ講義室等の差支を生ずる故開會を延さるゝも計られずといふ

○東京植物學會 同會よては近日の内雜誌と發兌せらるゝ計畫れよしなるか發行のうへハ定て植物學上大に有益なるを尠からざるべし

○羅馬字會 去る十日發兌の羅馬字雜誌第二號を見るに印刷ハ前號の如く鮮明にして紙質は頗る改良を加へたり論說等も亦前號に劣らず又去る十二日には同會々員の數四千三百卅名にして一ヶ月間ハ會員増加の數は平均一千四百二十六名なり此比例を以て増加すれば羅馬字の我邦よ普く行はれんこと數年を出でざるべし

○東京數學物理學會 同會の雜誌は是迄假名雜り文と用ひ formula 及び equation 等は渾て羅馬字にて書きしが之にては或ハ縦に讀み或は横に讀み其不便甚しきことなれば向後の悉皆羅馬字と以て書くことに定めたるよし又他の學會よても其雜誌には羅馬字を用ひんどの發議あるよしなれば諸學會の雜誌が羅馬字になることは遠きに非



るべし

○落雷の爲に鉛失す 去五月廿日に佛國巴里府大嵐ありたるが午前十時に天地も破るゝばかりの雷鳴なしたりしが其時モンマートルに近きサン、ウエンの高さ火爐の頂上に落雷せしと見ゆ蓋し此所に落雷したるハ多量なる鉛の某の用の爲に其頂上にのせありたるか爲に之に引かれて落ちたるものならむといふ説なり此事に關して最も奇なるとは鉛が全く失せて跡形だに殘らぬの一事なり

○加藤弘之氏 今に始めぬとながら羅馬字雜誌に掲載してある大學總理加藤弘之氏の「何ヲカ學問ト云フ」なる論說ハ氏か先頃大學教員の前にて演せられたるものなるか之を聽聞せし者は氏の卓見を稱へぬものなき由なり今羅馬字雜誌記者カ氏の許を得て之を同雜誌に掲載せられたるハ世の爲に幸甚と云ふべきのみ

○五月の雪 去五月十五六日の頃に巴里並にオーストリア及ヒハンガリー等に於て雪降りガイヤナにては爲に凍へ死したる者ありと云ふ

○羅馬字會 同會にては雜誌の材料となるべきものを羅

馬字文にあらずとも簡易の漢字假字混淆文にて投せられは字譯して掲載すると申すとなるか江湖諸彦金玉の文を投せられてはいかゞ

○書籍寄贈 安本徳寛編松原新之助閣植物書一冊を編者より兼崎茂樹譯夫 フカセツト 著 經濟問題集一冊を譯者より弊社へ惠投ありたり

雜錄

與某先生論漢學書

杉浦正臣

後學杉浦正臣致書某先生坐下。夫天地之間。有物必有類。水之於火。風之於土。皆此類也。是以先聖哲之於物。必因其類。以品騰之。易之八卦。書之九疇。皆莫不然。於是乎人有五倫。民有四等。豈於學問之道。獨無其類乎。在今日言之。歐學云。漢學云。亦皆類也。而世之歐學家。動輒斥非漢學。必欲使歸一于其學。猶要水而廢火。好風而惡土也。何其惑也。所以然者。良有以也。漢學之行于本邦。數百千年。因襲之久。不問物之同異。不問事之大小。必歸之于漢學之功。而不顧事物之有類焉。是所以招其斥非也。抑亦自然之勢也歟。夫勢者非人力之所能及也。而亦非無制之之術也。生竊

察方今漢學之勢。其於歐學。既不能抗之。又不能從之。因循

所以爲非也。且子亦非修漢學者乎。今使歐文盛耶。其勢不



明 治 十 八 年 七 月 廿 五 日 發 兌 百 八 十 五

察方今漢學之勢。其於歐學。既不能抗之。又不能從之。因循  
依違。坐待衰滅。如枯葉之在樹。如殘燈之無油。而未有能處  
于其間者也。何同朋之不勇于爲措置乎。生私不能無愧于天  
地也。生雖不敏。苟有所見。豈忍默止乎。請試論之。夫方今  
歐學之盛。殆有建瓶之勢焉。蓋歐學之切實。非如輓近漢學  
之迂濶也。雖然凡天下之物。不能免用舍之數焉。故其在有  
術者。則無用亦爲有用。在無術者。則有用亦爲無用。然則學  
之用舍。未必不因術之有無也。生嘗怪世之學者先生。動僻  
其所好。互相排擠。抑何心也。今水火風土。其性雖異。至其  
相待爲用則一也。設取其一而舍其他耶。豈得爲其用乎。譬  
之歐學猶水。漢學猶火也。水不可以兼火之用。而火亦不可  
以兼水之用。乃知漢學之不可以兼歐學。而歐學亦不可以兼  
漢學矣。是以生之所望。在于使歐學日盛。漢學亦月盛也。近  
頃歐學家有羅馬字會之舉。蓋欲廢漢字代之以歐文也。生以  
爲是措置漢學之一大機會也。乃直投刺爲其社員。或云。子  
以此舉爲機會則是。而至其爲社員則非也。何者。今切實如  
歐學。而却爲此迂濶之舉。是我黨乘勢之機也。子能知之。是  
其所以爲是也。而子之計。不獨不排之。又從而贊其舉。是其

所以爲非也。且子亦非修漢學者乎。今使歐文盛耶。其勢不  
能不使漢文衰。是助桀而成逆之道也。生以謂不然。夫漢學  
與歐學。固雖異類也。亦不可以其類之異相排也。况於黨同  
擊異古人之所戒乎。又况於事物之有類。爲自然之勢乎。生  
之所以爲社員。則自有說焉。使歐學盛耶。天下之修漢學者。  
自然不得不減。凡物多則賤。寡則貴。是物之情也。生竊計其  
數。蓋漢學在五以上。而歐學在五以下。所以漢學之日賤。而  
歐學之日貴也。今若欲使漢學賤耶。非生之所知也。苟欲使  
漢學貴耶。則今日之勢。生唯患歐學之不盛。漢學之不衰也。  
古人不言之。識時務在俊傑。徵之漢史。在昔管仲料桓公之  
不可成王道。制其時宜。以能成霸業。諸葛料巴蜀之不足制  
魏吳。能成三分之業。譬之今日之學。周與蜀漢學也。秦與魏  
吳歐學也。今也欲使天下之學歸一于漢耶。猶周與蜀之欲圖  
秦與魏吳也。其敗滅可坐而待耳。是不識時務者之爲也。生  
也雖非以俊傑自任。亦不無所見于此也。今夫偏倚漢學。以  
招敗滅歟。抑保一隅以圖永存歟。誰有樂敗滅而惡永存者  
乎。日月盈昃。數之所不免。而漢歐消長之理。亦所當然也。  
其求一統而招敗滅。不若保一隅而永存也。是以欲各專修其



所學。定其所據。以裨于世道而已矣。今若使漢學先生贊成羅馬字會耶。歐學之徒日益多。而漢學之徒月益減也必矣。而生之所謂物多則賤。寡則貴之實。可期日而致矣。是生之所以爲措置漢學之機會。而贊成之也。苟修漢學者自非辭貴而居賤。好亡而惡存者。則焉得不從事於此乎。果如此則漢與歐。各得其所。而施其所學。所謂水與火土與風。皆得相待爲用矣。其然後庶幾不負先聖哲品騰物類之意。而可以贊天地之化育矣。先生以爲是耶。非耶。

○

遺族ノ飢寒ナカラシムコトヲ欲セバ我カ生命ヲ保險セシ

ムルニ若カス

牛 東 山 人

余一日某ト語り談偶々遺族ノ事ニ及ヒ某ニ向ヒ其既ニ生命ヲ保險セシメタルヤ否ヲ問ヒシニ猶未タナリト云フ余曰ク苟モ遺族ヲシテ飢寒ニ苦ムノ患ナカラシメントスレバ君ノ生命ヲ保險セシムルニ若カス君彼ノ不幸短命ノモノヲ見スヤ屍肉未タ冷カナラサルニ其遺族ハ既ニ生計ニ苦ミ日ヲ逐ヒ月ヲ經ルニ隨ヒ名狀スヘカラサルノ状態ニ至ル蓋シ此人固ヨリ其遺族ヲ愛セサルニアラサレバ生前

相當ノ準備ヲ爲シ以テ死後ノ生計ヲ慮リシハ必然ナリ然ルニ其茲ニ至リタルハ畢竟不幸ニシテ早世シタルカ爲ニシテ余此ノ如キ人ヲ見ル毎ニ未タ曾テ慨然タラスンハアラス今君ハ生來強健ニシテ必ス長命ヲ保ツヘク隨テ充分ニ遺族ノ準備ヲ爲スヘキヲ以テ此生命保險ノ如キハ君ニ在テハ殆ト無用ナルカ如シ然レモ退テ之ヲ考レハ決シテ然ラサルモノアリ凡ソ強健ナル者ノ長壽ニシテ虛弱ナル者ノ短命ナルハ當然ナレモ強健ナル者ニシテ忽病死シ虛弱ナル者ニシテ却テ無病長命ナル者往々之アリ故ニ虛弱ナルモノ必シモ短命ナラス強健ナル者必シモ長命ヲ期ス可カラズ要スルニ人ノ命數ハ到底豫期スヘカラサルナリ左レハ君ハ縱令今日無病健全ナルモ何ゾ知ラン明日病ニ罹リテ一旦諱ム可カラサルコトアランヲ資産未タ充分ナラサルニ一旦不慮ノ變災アラバ遺族ノ困難ハ果シテ如何ソヤ君盍ゾ深思熟考シテ早ク萬全ノ策ヲ立テサルヤ某曰ク生命ヲ保險セシムルハ敢テ不可ナルコトナシ然レモ遺族ノ爲メニ資産ヲ準備スルニハ何ゾ必シモ此ノ如キ方法ヲ要センヤ只年々所得ノ若干ヲ貯蓄シ之ヲ以テ公債証

書等ヲ講求スルカ又ハ銀行ニ預ケテ利子ヲ付スレハ充分

料モ亦之ヲ拂フ能ハサルヘシト余又曰ク苟モ保險ノ必要



至ル蓋シ此人固ヨリ其遺族ヲ愛セサルニアラサレバ生前

法ヲ要センヤ只年々所得ノ若干ヲ貯蓄シ之ヲ以テ公債証

書等ヲ購求スルカ又ハ銀行ニ預ケテ利子ヲ付スレハ充分ニシテ且却テ益アリト余又曰ク是レ不安全ナノミナラズ又實際ニ行ヒ難シ何トナレバ貯蓄ノ事タルヤ所得ノ多キモノニ在リテハ固ヨリ容易ナリト雖其小ナル者又ハ未タ甚タ多カラサル者ニ在リテハ決シテ容易ノ業ニアラズ例ヘハ茲ニ毎年千五百圓ノ收額アリトセンニ此人年々百五拾圓ノ貯蓄ヲ爲サントスレハ平素務メテ節儉シテ冗費ヲ減省セサル可カラズ然ルニ節儉ヲ爲シ冗費ヲ省クハ收入此ノ如キ人ニ在テハ頗ル難事ニシテ多クハ其全額ヲ消費シ或ハ出費ノ却テ收額ニ超過スルコトアリ今假令毎年若干ノ貯蓄ヲ爲スヲ得ルトスルモ或ハ疾病ノ爲メ臨時ノ費用ヲ釀シ或ハ不時ノ變故ニ逢フテ意外ノ出費ヲ要スル等アリ斯ル時ニ於テハ當ニ貯蓄ヲ爲ス能ハサルノミナラス從來蓄積シタルモノモ亦消散スルニ至ルヘシ左レハ貯蓄ヲ以テ死後ノ準備ヲ爲サントスルハ決シテ萬全ノ策ニアラサルナリト

料モ亦之ヲ拂フ能ハサルヘシト余又曰ク苟モ保險ノ必要ナルヲ確信シテ其契約ヲ結フ以上ハ其保險料ヲ拂フハ敢テ貯蓄スルカ如ク困難ニアラズ其故ハ保險料ノ拂否ハ契約ノ効力ニ關シ契約ノ効力ハ遺族ノ禍福ニ關スルヲ以テ假令己レニ非常ノ困苦アルモ人情ヨリ論スルニ猶之ヲ拂ハサルヲ得ス但如何ナル方便ニ據ルモ到底保險料ヲ拂フヘキ餘裕ナキモノハ是亦例外ノ事ニシテ之ヲ以テ概論スヘカラサルナリト

某又曰ク生命ヲ保險セシムルハ固ヨリ可ナリ然レモ毎年保險料ヲ拂ヒ死後ニ至リ若干ノ金額ヲ請取ルハ計算上甚タ不利ナリ試ニ明治生命保險會社保險料ノ割合ヲ見ヨ滿三十歳ノ人死後一萬圓ノ被保金ヲ得ントスレバ契約ノ年ヨリ死亡ノ年迄毎年二百二十九圓ヲ拂ハサル可カラス然ルニ此人五十歳ニシテ死スレバ別ニ損失ナシト雖若シ五十五歳若クハ六十歳ニ至レハ計算上ノ損失ハ尠少ニアラス此ニ依テ考フレハ寧ロ二百二十九圓ヲ貯蓄シ之ヲ以テ公債証書若クハ其他確實ナル事業ニ運用スルニ若カス且ツ試ニ思ヘ毎年二百二十九圓ヲ貯蓄シ之ヲ確實ナル事



業ニ運用シテ年々六朱ノ利子ヲ得ルルハ（次年ヨリ利子ヲ元金ニ加ヘ）二十二年餘ニシテ一萬圓ニ達ス可シ六朱ニシテ猶然リ況ンヤ七朱八朱ニ於テヲヤト余曰ク保險書ニ就キ英國人ノ命數ヲ見ルニ「ノルサンプトン」命數表ニ由レハ滿三十歳ノ人ハ猶二十八歳三ヶ月ノ餘命アリトス然ルニ日本人ハ歐洲人ニ比スレハ多少短命ナルヲ以テ假リニ五年ヲ減スルルハ滿三十歳ノ日本人ハ猶二十三年ノ餘命アリ夫レ人ノ命數ハ固ヨリ期スヘカラス然レモ先ツ此平均命數ニ由リ算スルルハ前述ノ人猶ホ二十三年三ヶ月ノ餘命ヲ保ツテ全ク五十三歳三ヶ月ノ命數ヲ有スヘキ割合ナリ若シ此計算ノ如クナルルハ保險ト貯蓄トノ年限ノ差ハ僅ニ一年ニシテ保險ノ損毛ハ即右一年間ニ増殖スヘキ金額ナリ此金額ハ固ヨリ寡小ニアラサル可シト雖モ遺族ノ安心ヲ確証スルコトヲ思慮セハ其損毛ハ實ニ九牛ノ一毛ニ過キサル可シ之ヲ要スルニ人情ハ輒モスレハ貯蓄モ實行ス可ク長命モ必期ス可キコトヲ假定スルヲ以テ此損得ノ論モ發生スルコトナレモ若シ貯蓄ノ難ト命數ノ不定トヲ熟考シタランニハ保險ハ毫モ不利ノ契約ニアラサルヲ

知ル可キナリ  
某又曰ク今日保險會社ハ獨リ明治生命保險會社アルノミ故ニ苟モ保險ヲ托セントスレハ必ス同社ニ申込マサルヲ得ス而ルニ同社ハ固ヨリ不安心ナルコトアラサル可シト雖モ其盛衰ハ商業ノ振否ト同社ノ管理如何ニ關係スルモノナレハ或ハ不時ノ變動若クハ失策等ニ依リ俄ニ閉店スルナキヲ保ス可カラス若シ萬一此ノ如キ不幸アラハ多年ノ辛勞モ空シク水泡ニ屬スルヲ免レサルヘシト余又曰ク近來銀行等ノ閉店スルモノ多キヲ以テ見レハ會社ノ信スヘカラサルハ高論ノ如シ且ツ明治生命保險會社モ今日別ニ不安心ナルコトハアラサルヘシト雖モ他日如何ナル變動ヲ生スルカ固ヨリ之ヲ測ル可カラサルヲ以テ其信否ハ只各人ノ考案ニ任スヘシ而シテ余ノ今日ニ望ム所ハ生命保險會社ノ増設ニアリ其故ハ數多ノ會社アレハ各人其信スル所ノモノヲ撰テ其生命ヲ保險セシムルヲ得ヘク又會社相互ニ競争シテ其業ニ從事シ且ツ我カ保險セル所ノ人ヲ他ノ會社ニ保險セメテ以テ其責任ヲ減スルヲ得ヘケレハナリ抑々我カ保險セル人ヲ他ノ會社ニ托シテ保險セシムル

ハ獨リ會社ノミナラス亦被保人ノ利益ナリ例ヘハ甲者ア

海上保險若クハ火災保險ヲ爲スヘシ若シ又壯年ノ餘裕ヲ



ハ獨リ會社ノミナラス亦被保人ノ利益ナリ例ヘハ甲者アリ乙者ニ二萬圓ノ保險ヲ約束シタリト假定センニ甲者死スレハ乙者ハ一時ハ二萬圓ヲ拂出サ、ル可カラス然ルニ二萬圓ノ金額ヲ一時ニ拂フハ營業上固ヨリ不便ナシトセス故ニ若シ最初乙者ノ甲者ヲ保險スル時ニ方リ又丙者ニ甲者ヲ保險セシムルキハ甲者死シテ一時ニ大金ヲ拂フモ丙者ヨリ若干ノ金額ヲ受領シ以テ其出入ヲ平均シ別ニ不便ヲ蒙ルコナカルヘシ此方法タル獨リ右ノ如キ多額ノ保險ヲ爲スルニ必要ナルノミナラス尙又小額ノ保險ニ於テモ必要ナリ何トナレハ假令保險ノ金額寡少ナルモ傳染病流行等ノ時ニ於テハ死者多クシテ其拂出ス可キ保險金額モ亦隨テ大ナリ是レ余カ今日生命保險會社ノ増設アラントヲ望ム所以ナリ尤モ今日保險ヲ爲ス者ノ數甚々多カラサレモ他日若シ其數ノ増加スレハ會社モ亦隨テ増加スヘキハ自然ノ勢ナリ余ハ今論局ヲ結フニ臨ミ一言以テ告クル所アラントス凡ソ人ノ世ニ處スルヤ苟モ其財産ヲ保全シテ他人ノ妨害ヲ免レント欲セハ宜シク法律ノ保護ヲ受クヘシ又海上危難若クハ火災ノ如キ天變ヲ恐レハ宜シク

海上保險若クハ火災保險ヲ爲スヘシ若シ又壯年ノ餘裕ヲ以テ老後ノ安樂ヲ圖ラント欲セハ宜シク貯金ヲ以テ生命年金ヲ求ム可シ而シテ期ス可カラサルノ貯蓄ヲ變シテ必ス期スヘキノ收入トシ不時ノ不幸ニ際シ遺族ヲシテ困難ナカラシムルニ至リテハ我カ生命ヲ保險セシムルノ一法アルノミ

某曰ク可ナリ吾之ヲ熟考ス可シト

### 學會記事

○東京化學會記事 明治十八年六月廿日午後第一時ヨリ例場ニ會スル萬年會ヨリ同會報告第二三卷ヲ日本鑛業會ヨリ同會々誌第三號ヲ工學會ヨリ同會々誌第四十一卷ヲ東京學士會院ヨリ同院雜誌第七篇ノ二ヲ理學協會ヨリ同會雜誌第十四卷ヲ農商務省ヨリ農商工公報第三四號及ヒ贅病試驗成績第壹報ヲ會員中川謙二郎氏ヨリ化學肥料說一冊ヲ會員櫻井銳二氏ヨリ「パンフレット」一冊ヲ本會ヘ寄贈セラレタリ」本會規則改正中左ノ件ヲ議決シタリ○一本會ニ副會長ヲ置ク○一副會長ハ一度會長タリシ者ヲ



以テ之ニ充ツルコト一本會創立以來會長タリシモノハ一般副會長トナスコト一編輯掛五名ナリシヲ改メテ二名ヲ置クコト一抄録掛五名ナリシヲ改メテ八名ヲ置クコト一編輯掛及ビ抄録掛ハ他ノ役員ヨリ兼ヌルヲ得ルコト一總テ役員ヲ撰舉スルニハ出席會員ノ投票ニ由ラスシテ豫メ委員ヨリ役員ヲ指名シ其可否ヲ會員ニ問フコト一本會へ入會シ正員トナルモノハ入會金壹圓ヲ納ルコト一第九條第一項ヲ刪除シ更ニ左ノ箇條ヲ置クコト一規則ノ改正増補等ハ毎月ノ常會ニ於テ之ヲ發議シ其賛成ヲ得タルトキハ之ヲ他ノ在京會員ニ質シ次回ニ之ヲ決議スルモノトス改正規則ニ依リ役員撰定スルコト左ノ如シ

會長 櫻井錠二氏

久原躬弦氏

磯野德三郎氏

副會長 高山甚太郎氏

中澤岩太氏

松井直吉氏

植田豐橘氏

編輯掛

松井直吉氏

高山甚太郎氏

高松豐吉氏

久原躬弦氏

河喜多能達氏

書記

會計掛

坪井九馬三氏

抄録掛 清水鉄吉氏

石藤豐太氏

堀和爲昌氏

高松豐吉氏

石藤豐太氏

松本收氏

丹波藤吉郎氏

堀鉞之丞氏 On the oxidation of substituted aromaticamds

Compoundsニ就キ演説ス此日出席會員二十六名ナリ

○地學會記事 六月十六日地質調査所ニ於テ例會ヲ開ク

正員中島謙三君日本地學沿革史前回ノ續ヲ述フ正員山中

傳吉君本邦産眞珠岩 (PERRINE)ノ顯微鏡上ノ特性ヲ演述

ス出會席員十四名

○東京數學物理學會記事 明治十八年六月十三日午後第

一時半東京大學理學部内ニ會ス」寺尾壽君ヲ撰テ本日ノ

議長トス」記録委員隈本君前會ノ記事ヲ朗讀シ本會ノ保

認ヲ得」工學協會ヨリ同會報告第二號ヲ理學協會ヨリ同

雜誌第十三十四號ヲ地學會ヨリ同會誌甲ノ部ヲ川北朝鄰

氏ヨリ代數學例題解式ヲ東京物理學校ヨリシヤメン氏小

學物理書卷ノ一ヲ東京大學ヨリ學藝志林第九十三四號寄

付アリタリ」東京大學豫備門教諭田中竹次郎君ノ入會ヲ

會ヲ認可ス」本會記事ヲ羅馬字ニテ綴ルコトニ決ス」醫學集



明治十八年七月廿五日發兌 百九十一

付アリタリ」東京大學豫備門教諭田中竹次郎君ノ入會ヲ

認可ス」早川義文君退會ス志田林三郎君ハ山川櫻井君ノ

紹介ヲ以テ入會ヲ申込タリ」前會ニ於テ編纂委員ニ當票

シタル荒川重平君及ヒ外國雜誌報告委員ニ當撰シタル眞

野肇君ハ各々承諾サレタリ」兼テ會員ニ廻シ置キタル田

中館君本會規則修正案ヲ議シ左ノ如ク議決セリ

一第九條中入會者ニ略履歷ヲ出サシムルコト

一本會々員中へ別員ヲ置クコト

右ニ付キ別員規則取調委員三人ヲ撰舉スルコト左ノ如シ

田中館愛橘 寺尾 壽 川北朝鄰

次ニ左ノ演說アリタリ

風ノ理論ニ關スル研究 北尾次郎

マトリセス法小引(前ノ續キ) 隈本有尙

右終リテ退會ス時ニ午後六時ナリシ

○東京數學物理學會記事 七月四日第一土曜日午後一時

ヨリ東京大學理學部ニ於テ通常會ヲ開ク出席會員二十名

東京大學ヨリ學藝志林第九十五冊ヲ向井泰藏氏ヨリ記臆

ノ歌ツキ幾何學下卷ヲ寄附アリタリ」志田林三郎君ノ入

會ヲ認可ス」本會記事ヲ羅馬字ニテ綴ルコトニ決ス」醫學集

談會ヨリ同會員及ヒ本會員ハ互ニ傍聽ヲ許スヘキコトヲ申

込ミタリ乃チ之ヲ可決ス」當日左ノ講述アリタリ

本朝數理先哲遺稿第一 整數術ノ部 川北朝鄰

光ノ速度測定ノ新法 山川健次郎

風ノ理論ニ關スル研究(前號ノ續キ) 北尾次郎

正 誤

第四十五號正誤

百三十ページ上段十七行目系族分脈ハ分派。○全下段三行

目獨リ其時代ハ某。○全五行目此一。鐵鎖ノ一ハ愆。○百二十

一ページ下段初行千萬。不易ハ千古ノ誤植

百五十九ページ七行目ブリユースリー。ブリユースター

ノ誤

百六十ページ詩中 徒學。蟻ハ尙類。螭。噬。噬。ハ噬。水滌

々ハ水滌。々 朽椿ハ朽椿 圖料。擲ハ願。簪。蔽。古今三千歲

東西幾百邦ハ斷崖千尺外烟波夜獨。從ノ誤

又其末幅ノ註ニ徐延。評トアルハ徐廷。評ノ誤



